

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XII - 2

1985

滋賀県教育委員会
財團法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIII - 2

1985

滋賀県教育委員会
財團法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県下の県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、ほ場整備事業の拡大とともに、その件数も年々増加し今年度は36遺跡を数えることになりました。

ここに、実施しました発掘調査の報告書を刊行し、広く埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助にしたいと存じます。

なお、今回は上記の遺跡のうち整理の完了しました25遺跡を9分冊に分けて刊行するものであります。

最後になりましたが、ほ場整備に伴う発掘調査の円滑な実施にご理解をいただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、深く感謝申しあげますとともに、この報告書の刊行にご協力いただきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長

市 原 浩

例 言

1. 本書は、滋賀県の実施する県営は場整備事業に係る蛇塚遺跡の発掘調査報告書で、は場整備関係発掘調査報告書のIII-2にあたる。
2. 本調査は、滋賀県教育委員会の指導により財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 調査および整理・報告は、滋賀県埋蔵文化財センター技師宮崎幹也が担当した。
4. 調査組織は次の通りである。

調査指導 田中勝弘（滋賀県教育委員会文化財保護課主査）

（　〃　〃　技師）

田路正幸（　〃　〃　技師）

主任調査員 宮崎幹也（滋賀県埋蔵文化財センター技師）

調査員 植田文雄（仏教大学）、和田光生（仏教大学大学院）

調査補助員 深井 圭（駒沢大学O.G.）、北村玉男（京都工芸繊維大学）、広瀬幸男、榎本真理（大谷大学）

小杉昌史（仏教大学）、井田泰弘、奥田清人、岡治博之、大野理夫、浦辺正幸（岐阜経済大学）、出路清久、福本光宏（花園大学）、西埜 博（大阪商科大学）、沢村栄治、轟 浩司（京都産業大学）、山村 健、辻 幸彦（京都学園大学）、手塚貴子（関西外国语大学）、田淵志津子、林由美、三野小雪、林 美和、正木美徳、赤江智子、中西賀津子、芳村妙子、清水宏美、高橋弘美、神保公栄（京都文教短期大学）、林 華美、白波瀬尚美（追手門学院大学）、安楽英子（京都経営経理専門学校）

作業員 福本增太郎、中西昭市、久郷 煉、橋口勝次、橋口和平、小西増一、西村辰二郎、中西太一、田川初二、小西長夫、小西正夫、中西武治、西村和雄、福沢博司、木本与八、福本啓次、都西秀夫、橋口平治、山本 弘、福本 平、小西晃一、小西正機、小西良一、橋口仁兵衛、井上一三、水谷新一郎、久郷泰次郎、小西定雄、久郷佐夫、小西俊治、水谷茂雄、田中啓一、田中 純、小西幸男、小西安治、川村清吉、小西 宏、森井 守、小西善一郎、小西太良吉、小西勝太郎、小西謙二、小西音三、小西利夫、小西幹夫、中井千代、小西いと、小西きみ、平田志津子、橋口きぬ、中西タネ、木本みよ、畠中寿子、福沢喜美子、水谷峯子、田中綾子、福沢美恵子、小西菜穂子、水谷まさえ、山本節子、福本美智子、福沢喜美枝、水谷和子、田中初恵、水野藤枝、小西雪子、水西房枝、小西ヨシ、川島君枝、森井サワ子、小西房子、小中きぬ、川村みか、水谷房枝、沖 いと、福沢治子、木本フサ子、沖加寿子、田中信子、福本喜久子、小西明子、田中百子、久郷きみ、木本きよ、中西幸子、田中春子、福本加寿恵、小西節子、小西すが、久郷美恵子、田中初枝、隱岐寿子、小西寿子、小西君子、小西知子、小西きよ、小西美恵子、中井いえ子、小西万津、中井初恵、大川美代子、神田絹子、小林静子、志田俊子

事務員 江波弥太郎（財団法人滋賀県文化財保護協会事務局長）

松本 弘（　〃　〃　総務課主事）

5. 現地での図面作成・写真撮影は調査者全員があたり、遺物写真については寿福 滋氏を煩わした。記して識意を表したい。

目 次

序 文

例 言

1. はじめに	1
2. 位置と環境	1
3. 調査	3
(1) A 地区	4
(2) B 地区	8
(3) C 地区	10
(4) D 地区	21
4. まとめ	22

挿 図 目 次

第1図 蛇塚遺跡位置図および周辺の遺跡	2
第2図 蛇塚遺跡調査範囲図	3
第3図 A地区トレント配置図	4
第4図 A地区 第12トレント遺構平面図	5
第5図 A地区 出土遺物実測図	6
第6図 B地区 出土遺物実測図	8
第7図 B地区 遺構平面図	9
第8図 C地区 遺構平面図	10
第9図 C地区 S X -03出土遺物実測図	11
第10図 C地区 S K -04出土遺物実測図	13
第11図 C地区 S B -02遺構平面図	14
第12図 C地区 S B -06遺構平面図	15
第13図 C地区 S B -07遺構平面図	16
第14図 C地区 S B -08遺構平面図	17
第15図 C地区 S B -05遺構平面図	18
第16図 C地区 出土遺物実測図	19
第17図 C地区 出土遺物実測図	20
第18図 D地区 トレント配置図	21

図 版 目 次

- 図版 1(上) A地区 調査前景
(下) A地区 第12トレンチ全景(南より)
- 図版 2(上) A地区 第12トレンチSX-01(北東より)
(下) A地区 第12トレンチSX-01(北より)
- 図版 3(上) A地区 第12トレンチSX-01(北より)
(下) A地区 第14トレンチSX-01(南より)
- 図版 4(上) A地区 第12トレンチSX-01(南西より)
(下) A地区 第12トレンチSX-01(北西より)
- 図版 5(上) A地区 第12トレンチSB-01(南東より)
(下) A地区 第12トレンチSD-03(南東より)
- 図版 6(上) A地区 第12トレンチSD-03遺物出土状況
(下) A地区 第12トレンチSD-03遺物出土状況
- 図版 7(上) A地区 第12トレンチSD-03遺物出土状況
(下) A地区 第12トレンチSD-03遺物出土状況
- 図版 8(上) A地区 第9トレンチ(東より)
(下) A地区 第6トレンチ(北より)
- 図版 9(上) A地区 第9トレンチ(西より)
(下) A地区 第2トレンチ(西より)
- 図版 10(上) B地区 全景(西より)
(下) B地区 第3トレンチ(東より)
- 図版 11(上) B地区 第2トレンチ(北東より)
(下) B地区 第1トレンチ(東より)
- 図版 12(上) C地区 調査風景
(下) C地区 調査風景
- 図版 13(上) C地区 第1トレンチ全景(東より)
(下) C地区 第1トレンチSD-01、03
- 図版 14(上) C地区 第1トレンチSB-01(東より)
(下) C地区 第1トレンチSB-01(北より)
- 図版 15(上) C地区 第2トレンチ全景(西より)
(下) C地区 第2トレンチSE-01(北より)
- 図版 16(上) C地区 第2トレンチSX-02(南より)
(下) C地区 第2トレンチSX-02(南より)
- 図版 17(上) C地区 第3トレンチ上層遺構面(北より)
(下) C地区 第3トレンチ下層遺構面(北より)
- 図版 18(上) C地区 第3トレンチSX-05(南より)
(下) C地区 第3トレンチSB-12(西より)

- 図版 19(上) C地区 第3トレンチSK-01(北より)
(下) C地区 第3トレンチSK-02(西より)
- 図版 20(上) C地区 第3トレンチSX-11(西より)
(下) C地区 第3トレンチSX-11(北東より)
- 図版 21(上) C地区 第3トレンチSB-02(北東より)
(下) C地区 第3トレンチSB-02(北東より)
- 図版 22(上) C地区 第3トレンチSD-11(北東より)
(下) C地区 第3トレンチSB-02、SX-12(東より)
- 図版 23(上) C地区 第3トレンチSB-03(南より)
(下) C地区 第3トレンチSB-04(西より)
- 図版 24(上) C地区 第3トレンチSX-12、SK-03(南より)
(下) C地区 第3トレンチSK-03(南より)
- 図版 25(上) C地区 第3トレンチSK-03(東より)
(下) C地区 第3トレンチSK-03遺物出土状況
- 図版 26(上) C地区 第3トレンチ下層遺構面全景(北西より)
(下) C地区 第3トレンチSB-05(北西より)
- 図版 27(上) C地区 第3トレンチSB-05(東より)
(下) C地区 土層堆積状況(北西より)
- 図版 28(上) C地区 第4トレンチ全景(南より)
(下) C地区 第4トレンチSD-12(南西より)
- 図版 29(上) C地区 第4トレンチSB-11(南西より)
(下) C地区 第4トレンチSB-10(西より)
- 図版 30(上) C地区 第4トレンチSB-06(西より)
(下) C地区 第4トレンチSB-06土壠(北より)
- 図版 31(上) C地区 第4トレンチSB-07(南より)
(下) C地区 第4トレンチSB-07(東より)
- 図版 32(上) C地区 第4トレンチSB-08(南より)
(下) C地区 第4トレンチSD-07(東より)
- 図版 33(上) C地区 第4トレンチSK-04収蔵
(下) C地区 第4トレンチ遺物出土状況
- 図版 34(上) D地区 全景(西より)
(下) D地区 全景(東より)
- 図版 35(上) D地区 第3トレンチ
(下) D地区 第5トレンチ
- 図版 36 出土遺物
- 図版 37 出土遺物

- 図版 38 出土遺物
- 図版 39 出土遺物
- 図版 40 出土遺物
- 図版 41 出土遺物
- 図版 42 出土遺物
- 図版 43 出土遺物（A地区第12トレンチ S D-01）
- 図版 44 出土遺物（A地区第12トレンチ S D-01）
- 図版 45 出土遺物（B地区）
- 図版 46 出土遺物（C地区第3トレンチ S D-11）
- 図版 47 出土遺物（C地区第3トレンチ S D-11）
- 図版 48 出土遺物（C地区第3トレンチ S B-02）
- 図版 49 出土遺物（C地区第3トレンチ S B-02）
- 図版 50 出土遺物（C地区第3トレンチ S B-03）
- 図版 51 出土遺物（C地区第3トレンチ）
- 図版 52 出土遺物（C地区第3トレンチ）
- 図版 53 出土遺物（C地区第3トレンチ S K-03）
- 図版 54 出土遺物（C地区第3トレンチ S K-04）
- 図版 55 出土遺物（C地区第4トレンチ S D-12）

1. はじめに

本調査は、滋賀県が実施する県営ほ場整備事業（上田第1工区）に伴うものである。今回調査の対象となつた近江八幡市上田町西部の耕作地帯は、これまでに遺物の散布も知られておらず、滋賀県教育委員会発行の『滋賀県遺跡目録』にも記されていない箇所であった。しかしながら工事開始直後に、切土箇所より多量の遺物が出土し、遺構の存在も明らかになったため、緊急に遺跡の範囲・性格・時期を捉える必要が生じ、試掘調査ならびに発掘調査を実施した。

調査を開始した結果、小字「蛇塚」と呼ばれる箇所、小字「杉ノ木」と呼ばれる箇所、さらにこれより南へ約70mの三明川改修工事予定地周辺箇所の3地点に遺跡の広がりが確認され、広義的に「蛇塚遺跡」と命名された。

蛇塚遺跡の発掘調査は、文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算（13,000,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。調査および整理期間は、昭和59年4月2日～昭和60年3月30日とした。

2. 位置と環境

蛇塚遺跡は、近江八幡市上田町に所在する。近江八幡市の中央北部には、市のシンボルともいえる鶴翼山（八幡山）がそびえるが、遺跡は、これより南東7.5kmにある。

遺跡の所在する上田町一帯は、觀音寺城（蒲生郡安土町）城主佐々木六角一族の鉄砲火薬に必要な硝石を作っていた職人が住んでいた所で、今でも毎年5月初旬におこなわれる篠田神社の古式花火奉納で著名なところである。

今回の調査の対象となった蛇塚遺跡は、上田町の西端部にあたり、白鳥川右岸を西限とする。遺跡の南限には東海道新幹線が走るが、これより南方1.2kmには千僧供遺跡群がある。千僧供遺跡群には、弥生時代の集落跡である勤学院遺跡、数多くの形象埴輪の出土で知られる供養塚古墳、白鳳期の寺院跡で知られる千僧供庵寺、聖德太子49院の1つとされる長光寺遺跡などがある。また蛇塚遺跡の東方1kmには、鎌倉時代の寺院跡上田遺跡や上田氏の居城上田氏館が所在する。

蛇塚遺跡の一帯は沖積平野の氾濫源と考えられ、調査地区の大半は砂礫層上にあたり、これまで遺跡の存在が知られずにいた原因の1つであろう。



第1図 蛇塚遺跡位置図および周辺の遺跡

1. 北津田向山遺跡
2. 円山遺跡
3. 白王A遺跡
4. 南津田北遺跡
5. 北之庄城遺跡
6. 波小井城遺跡
7. 岩町遺跡
8. 新左衛門遺跡
9. 正尺遺跡
10. 博労遺跡
11. 高木遺跡
12. 西庄遺跡
13. 永明寺遺跡
14. 八甲遺跡
15. 高岸遺跡
16. 成教寺遺跡
17. 17スヂ遺跡
18. 大林遺跡
19. 東源寺遺跡
20. 土田遺跡
21. 七ツ塚遺跡
22. 舞館前遺跡
23. 益田遺跡
24. ツバナ遺跡
25. ツバナ遺跡
26. 長原遺跡
27. 鹿原遺跡
28. 小船木遺跡
29. 小森木遺跡
30. 金剛寺城跡
31. 出雲山遺跡
32. 頤興寺遺跡
33. 車塚遺跡
34. 安山遺跡
35. 丸山遺跡
36. 安養寺遺跡
37. 法華寺遺跡
38. 安養寺は摩寺遺跡
39. 田中前遺跡
40. 次の口遺跡
41. 上田遺跡
42. 長光寺遺跡
43. 住進坊遺跡
44. 岩倉山北遺跡
45. 薬剣山城遺跡
46. 馬頭城遺跡
47. 小田中遺跡
48. 表張御遺跡
49. 義音堂遺跡
50. 馬場寺遺跡
51. 金剛寺遺跡
52. 千僧寺遺跡
53. ラカン遺跡
54. 舞館前遺跡
55. 岩塚遺跡
56. トギス塚遺跡
57. 妙感寺遺跡
58. 馬場寺遺跡
59. 山南遺跡
60. 田中堂遺跡
61. 永慶寺遺跡
62. 安吉遺跡
63. 倉橋郡御寺遺跡
64. 薬本山遺跡
65. 倉橋郡御寺遺跡
66. 弁天島遺跡
67. 蓮池上遺跡
68. 法華根遺跡
69. 安泰セミナリヨ遺跡
70. 西法寺遺跡
71. 木村城遺跡
72. 常樂寺遺跡
73. 普覺寺遺跡
74. 竹ノ瀬遺跡
75. 慈恩寺遺跡
76. 馬場寺遺跡
77. 安樂寺遺跡
78. 某日山遺跡
79. 上出雲遺跡
80. 上平木遺跡
81. 日枝遺跡
82. 下羽田遺跡
83. 中羽田西山遺跡
84. 北隈越遺跡
85. 豊原山遺跡
86. 電石山遺跡
87. 津土屋敷遺跡
88. 中野遺跡

3. 調査

発掘調査の対象は、切土箇所 2ヶ所と排水路箇所 2ヶ所の都合 4ヶ所あり、それぞれ A 地区～D 地区として調査を実施した。

各地区的調査は、以下の通りである。



第2図 蛇塚遺跡調査範囲図

(1) A 地区

当地区は、南北11.7m・東西62.5mの範囲で、周囲の水田面より60~80cm高い畠地となっている。小字名で「蛇塚」と記されており、地元では「ヘビヅカ」とか「ヘブヅカ」と呼ばれているが、古墳や塚の伝承は無く、從来から遺跡の存在は知られていなかった。

今回はほ場整備事業の一端として、当地区的北端より約35.4mの位置に、東西方向にのびる幅約6mの道路が既設されており、道路を境として、北部は全面調査を実施し、南部は試掘調査の後に協議をおこなうという方針で実施した。

調査は、南部の試掘から開始し、バックホウにより表土（耕作土）等を除去した後、遺構・遺物の追求をおこなった。

A地区の基本土層は、第Ⅰ層・耕作土、第Ⅱ層・黄褐色土層、第Ⅲ層・暗黃褐色土層、第Ⅳ層・淡黃灰色粘質土層と続き、第Ⅲ層の上面と第Ⅳ層の上面の2箇所で、遺構を検出し、第Ⅳ層上面を地山と確認した。

南部では、11箇所に試掘トレンチを設けて発掘したところ、調査区のはば全域にわたり、重複した遺構がひろがると判明した。遺構の大半は、柱穴と溝状遺構で、上層の遺構面からは柱穴と幅40cm前後の溝状遺構が検出されたのに対し、下層の遺構面からは、幅80cm以上の折曲した溝状遺構が検出された。

出土遺物は、弥生式土器（中期後半～後期）、土師器、須恵器などがある。

続いて道路の北部は、第12トレンチと呼んで全面調査を実施した。基本土層は道路南部の第1~11トレンチとは同じであるが、第Ⅲ層中に多量の礫石が含まれており、調査の当初では、下層の遺構を確認できずにいたが作業員の根気強い精査によって、下層の遺構面を検出するに至った。

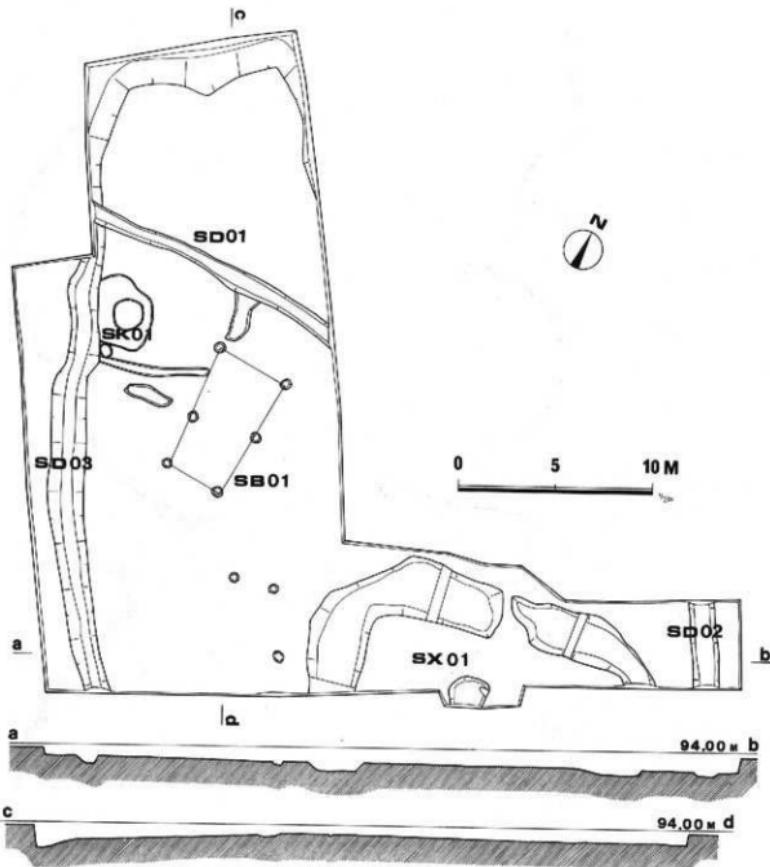
上層の遺構面で検出されたのは、溝状遺構1(SD-01)と掘立柱建物跡1(SB-01)であった。

SD-01 幅96~180cm、深さ10~25cmを測り、東から西への傾斜をもつ、出土遺物は、少量の土師器片があるのみである。

SB-01 衍行2間(6.6~6.8m)、梁行1間(3.0~3.8m)で、主軸をN-4°-Eにもつ。柱穴内の埋土は、暗褐色を呈する砂礫の多い土で、掘方と柱穴の明確な区分はできなかつた。出土遺物は無い。



第3図 A地区 トレンチ配置図

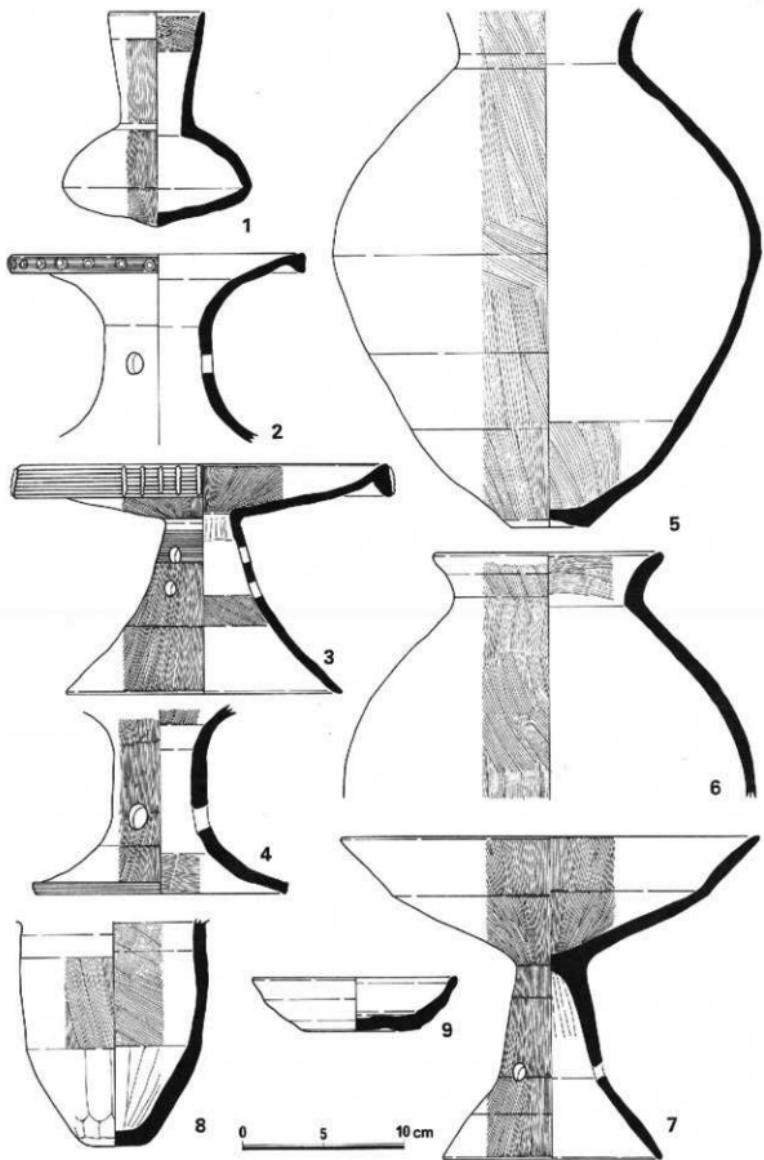


第4図 A地区 第12トレンチ 遺構平面図

下層の遺構面で検出されたのは、溝状遺構2(SD-02, 03)、土坑1(SK-01)、方形周溝墓1(SX-01)である。

SD-02 第12トレンチの南東隅で検出された南北方向にのびる遺構である。幅40m、深さ20cmを測り、基底部は平坦な状態を示す。遺構の埋土は暗灰褐色粘質土層で、隣接する方形周溝墓(SX-01)の周溝部埋土に類似する。出土遺物は無い。

SD-03 第12トレンチの西端部を南北にのびる遺構で、幅1.40~1.90m、深さ50cmを測る。形状はU字形に近く、北部で東方へ屈曲し外側のかたを失なう。遺構の埋土は暗灰褐色粘質土層の単純一層であり、北部へいくにしたがって礫石の包含量を密にする。遺構の南部10m程では多量の遺物が出土した。遺物は弥生式土器が中心となっており、壺・甕・高杯・器台などが認められる。



第5図 A地区 出土遺物実測図

S K - 01 3.5m のだ円形内に1.5m の円形の形をもつ二段構造の遺構であり、深さ40cmを測る。S D - 03よりも古い遺構であるが、出土遺物が無く、性格は不明。

S X - 01 第12トレンチの南端にある方形周溝墓である。周溝部は幅3.1m を最大とし、深さ45cmまでを測る。周溝の北辺は中央に立橋部を持つ。遺構はさらに道路の南部にのびるため、第13トレンチ・第14トレンチを設定して遺構の拡がりを確認した。その結果、東西約18.5m・南北約18.0cmの規模の周溝部であることが判明した。また第14トレンチでは、周溝の南辺中央に立橋部が確認された。遺構の主軸はN - 16° - Wに近いと考えられる。主体部と考えられる遺構が、第12トレンチの南端で検出されたため、トレンチを南方へ拡張したところ幅1.9m、長さ1.6m以上、深さ20cmの土坑が確認された。土坑内には遺物の存在が認められる、周溝部と同時期の遺構であるか決定することができなかった。

第5図に示すのは、A地区から出土した遺物である。上層の遺構面から出土するのは、飛鳥時代の土師器(8)と、中世の土師器杯(9)などで、この他に近江系の長嗣甕などがある。(1)~(8)に示すのは、下層遺構面から出土した遺物で、S D - 03の一括遺物である。これらの土器は弥生時代後期のものである。

(2) B 地区

当地区は、三明川改修工事予定地に隣接した第3号小排水路箇所である。現状は標高93mの水田となっている。

調査は南北幅2m、東西の長さ112mを対象としたが、電柱の埋設箇所や三田川からの湧水のため全城の調査ができず、都合7ヶ所のトレンチを設定し、調査を実施した。

第7図で示すように、約4m離れた南側を三明川改修工事に伴い発掘調査したところ、表土層直下から遺構が確認された。これによって遺構の抜がりをつかむことができた。

7ヶ所のトレンチで確認された遺構は以下のとおりである。

第1トレンチ 溝状遺構2、柱穴6。

第2トレンチ 溝状遺構2、柱穴1。このうち西側の溝は、三明川調査区のSD-01につながると考えられ、弥生時代中期後半のものであろう。また、東側の溝は同様にSD-02につながると考えられ、弥生時代後半から古墳時代初頭のものであろう。

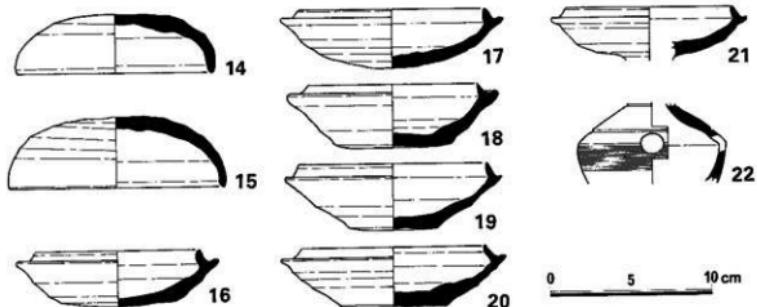
第3トレンチ 溝状遺構1、柱穴4。この溝は、三明川調査区で確認されておらず、出土遺物も無く時期不明である。柱穴は、いずれも直徑10cm前後のものである。

第4トレンチ 幅6.6m、深さ20cmの落ちこんだ遺構が1つ確認された。三明川調査区のSX-02につながると考えられるが、遺構の性格は不明。遺物としては、弥生時代中期後半の土器が若干量認められる。

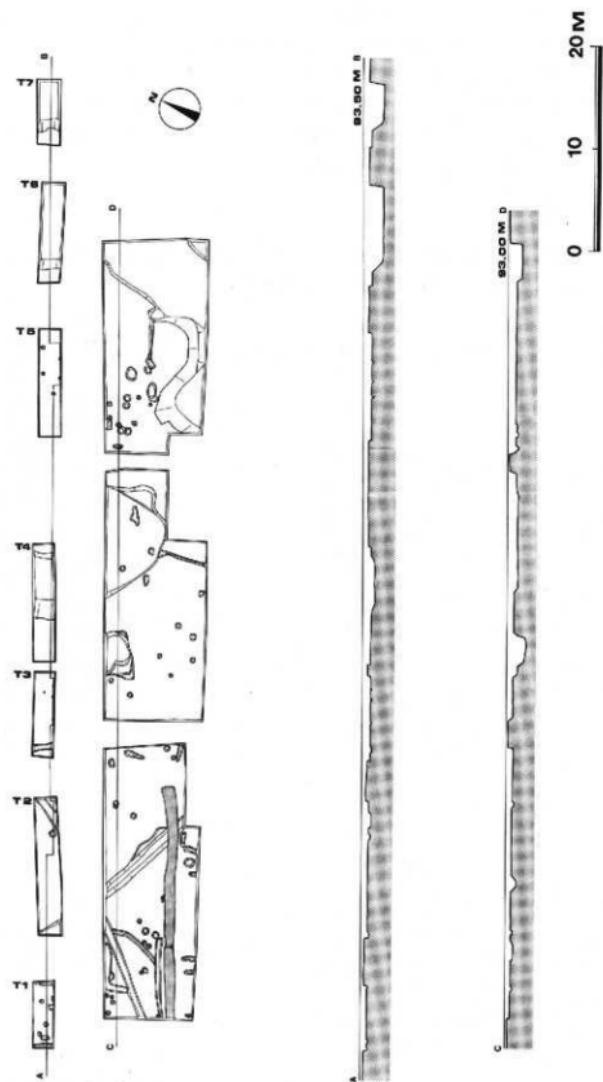
第5トレンチ 柱穴5。

第6トレンチ・第7トレンチ、2箇所で河川の氾濫によると思われる落ちこんだ遺構を確認した。いずれも深さ90cm程のもので、最下層の淡灰白色砂層中より6世紀代の須恵器を出土している。

以上のことから、B地区では弥生時代中期後半から古墳時代中期にかけての遺構・遺物が確認された。これらの遺構は、現在の表土下から非常に浅い標高92.6~92.8mに位置し、同一遺構面に複合することが知られた氾濫が繰り返され、消失したようである。



第6図 B地区 出土遺物実測図



第7図. B地区遺構平面図

(3) C 地区

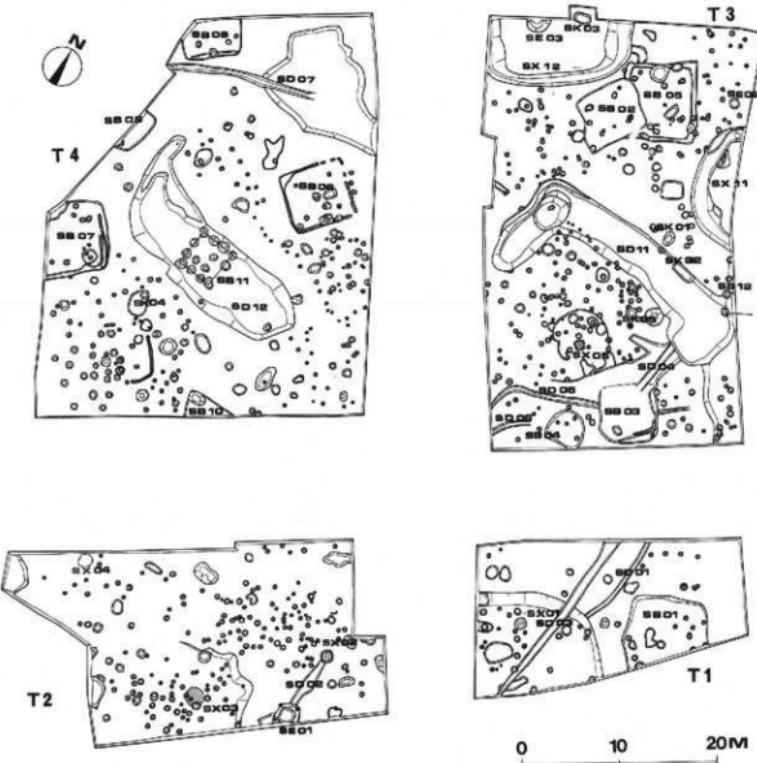
当地区は、南北71m・東西82mの範囲で、周囲の水田面より50~140cm高い畠地となっている。小字名で「杉ノ木」と呼ばれる当地区には、近世末期頃の墓地としての伝承がある。

A地区から西へのびる支線2号道路と、これに直行する支線1号道路が、C地区を4区分しており、南東部を第1トレントチ、南西部を第2トレントチ、北東部を第3トレントチ、北西部を第4トレントチと呼ぶこととする。

調査区を直交する2本の道路は、表土下80~100cmを既に切土して作られており、遺物包含層や遺構が断面に露頭し、周間に遺物が散乱している状況で調査は開始された。

1. 層位

C地区的基本土層は、第I層・耕作土層、第II層・淡黄褐色土層、第III層・暗茶褐色混疊粘質土層、第IV層・暗青灰色粘質土層(第3トレントチのみ確認)、淡灰褐色砂礫層である。



第8図 C地区遺構平面図

第Ⅰ層・第Ⅱ層は合わせて40~60cmを測り、第Ⅲ層に至る。第Ⅳ層は20~45cmの厚みをもった遺物包含層であり、第Ⅳ層上面および第Ⅴ層上面に遺構を検出した。

C地区のうち第3トレンチのみ、第Ⅳ層を検出し、上面と直下で遺構を検出した。

2. 遺構

C地区では、第Ⅲ層上面・第Ⅳ層上面・第Ⅴ層上面の3面で遺構が確認され、出土遺物から7時期のものが存在することが判明した。以下に年代順に遺構を説明する。

A. 中世火葬墓

第Ⅱ層・淡黄褐色土層をバックホーで除去した時点で、第Ⅲ層上面に焼土坑を確認した。焼土坑は、第1トレンチ(SX-01)・第2トレンチ(SX-02・03・04)・第3トレンチ(SX-05)で検出された。

SX-01 東西120cm・南北120cmを測る円形に近い土坑であり、深さは無いが床面は赤く酸化している。遺物は含まれていない。

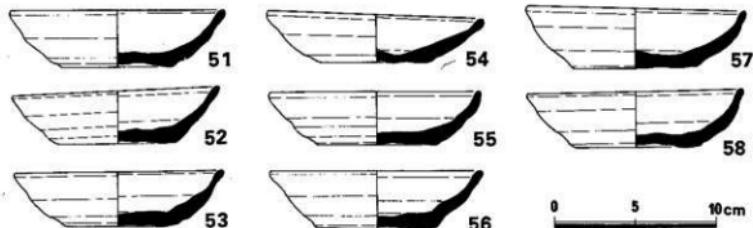
SX-02 東西130cm・南北140cmを測る隅丸方形を呈する土坑で、深さ12cmを測る。図版12に示すように遺構検出時には、焼成を受けた石が2つ置かれていた。土坑内には、炭を含んだ灰色土が堆積しており、土師器片、鉄くぎ、骨片、古銭が出土した。土師器および鉄くぎは埋土の上部から出土した経片であるが、古銭は床面から出土し5点のみ確認された。古銭はいずれも中国銭で、開元通宝(唐銭)、祥符元宝・皇宋通宝・淳化元宝(北宋銭)、永樂通宝(明銭)である。

SX-03 東西180cm・南北200cmの範囲で、焼土混じりの落ち込みを検出した。埋土内からは、土師器の杯10個体以上と古銭27個体が出土した。古銭は和銭で、いずれも貞觀永寶である。この遺跡の床面には、焼成による酸化の跡が無く、先のSX-01・02とは性格や年代が異なると思われる。

SX-04 東西140cm・南北120cmを測る円形に近い土坑で、深さ4cmを測る。床面は、焼成を受けて酸化しており、壁部はほとんど残存していない。出土遺物は無い。

SX-05 東西100cm・南北100cmを測る隅丸方形を呈する土坑で、深さ14cmを測る。図版14に示すように、人骨を多量に残存していた。壁面および底面は焼成を受けて酸化している。出土遺物は無い。

以上5つの遺構が、遺物包含層(第Ⅳ層・暗茶褐色泥炭焼土層)の上面で検出されたが、このうちSX-01・02・04・05の4つは、共通の特徴をもつ遺構として捉えることができる。これらは、いずれも壁部や底部が酸化しており、骨片と少量の遺物を含むことから、火葬墓と考えられる。同様の遺構は、湖東地方の各地にみられ、近年の調査例では、竜王町堤ヶ谷遺跡・能登川町猪子遺跡などがあげられる。このうち能登川町猪子遺跡では、12世紀末葉の土坑を火葬墓が切っている状況から13世紀以降のものとして捉えられる。蛇塚遺跡で



第9図 C地区 SX-03出土遺物実測図

は、S X-02の出土遺物に「永樂通宝」が含まれることから、15世紀初頭を年代の上限におくことができる。

B. 奈良・平安時代の遺構

第三層の遺物包含層を除去すると、C地区の大半では淡灰褐色砂礫層(第V層)に至る。この層位は東へといくにしたがって礫石が減少し、砂質土層に変化する。C地区的遺構の大半は、この層の上面に存在する。

S E-01 第2トレンチの中央南端で検出された同遺構は、東西250cm・南北240cm以上の掘方をもち、覆屋の四柱穴を残す。本体は150cm(約5尺)四方の木組の井戸であり、深さ約80cmを測る。板材の残りは悪く、南側の一部で、たて板の木組みが確認された。出土遺物には、須恵器・土師器などがある。

S D-03 第1トレンチを南北方向に走る溝社遺構である。幅80~100cm、深さ30cmを測る。第1トレンチの南西部は、約30~40cmの落ち込みを持ち、淡茶灰色土層が堆積している。同層位中には、平安時代の須恵器(二耳壺)が含まれていることから、淡茶灰色土層の上面を走るS D-03は、平安時代を上限とする遺構としてとらえられる。

S B-11 第4トレンチの中央に位置する桁行3間(3.8m)、梁行3間(3.8m)の柱建物である。同遺構は、6世紀の遺物を含む溝状遺構(S D-12)と重なって検出されたが、S D-12の埋没後に建てられたもので、主軸をN-9°-Wにもつ。

S B-12 第3トレンチの東端で確認された桁行3間(5.4m)以上の建物跡と考えられ、溝状遺構(S D-11)埋没後に建てられたもので主軸をN-36°-Wにもつ。

以上のほかに、井戸(S E-02・03)などが、包含層除去後の最も新しい時期の遺構として考えられる。

C. 飛鳥時代の遺構

出土遺物の中には、6世紀後半~7世紀代の土師器・須恵器が多く含まれるが、同時代の遺構として捉えられたのはS D-07のみであった。

S D-07 第4トレンチの北東隅には、6世紀の須恵器までを包含する落ち込みがあり、この埋土上を東西方向に横切るのがS D-07である。遺構は幅60cm、深さ25cm程の溝であるが、東方で浅くなっている。遺構内部からは、長胴壺の一部が出土した。

D. 古墳時代の遺構(1)

S D-11 第3トレンチの中央でコの字形に屈折する溝状遺構である。幅4.5m前後、深さ50cmの溝内には、弥生式土器・土師器・須恵器が含まれる。

S D-12 第14トレンチの中央でL字形に屈折する溝状遺構である。最大幅7.2mを測り、深さ45cmの溝内には、土師器・須恵器が含まれる。

S D-11・12とともに、遺構の基底部から出土する遺物が6世紀の須恵器であり、いずれも古墳時代の遺構である可能性をもつ。S D-11の埋没後にはS B-12が存在し、S D-12の埋没後にはS B-11が存在しており、いずれも平安時代までに消失していたようである。遺構の性格として考えられる1つには、中期墳の周溝があげられる。S D-11は、その南側に一辺約15mの方形墳を想定することができる。また、S D-12も、との北側に同規模の方形墳を想定することができるが、いずれの場合も消失している周溝箇所に、何等影響を受けていない下層遺構が残存しており、2基の存在は推測の域を出ないものである。

E. 古墳時代の遺構(2)

古墳時代の遺構として、布留式土器をともなう遺構が存在する。

S K-04 南北2m80cm、東西2mの円形の土括が、第4トレンチの南寄りで検出された。この土括は、深さ10cm程の非常に浅いものであったが土括の北東隅で、直径約40cmの丸形のピットを確認した。ピットの内部

には、胴部径26.0cm・高さ28.5cmの球形を呈した壺が、倒立した状態で納められていた。

壺は、口縁部を損失しており、口径11.2cm高さ7.7cmの小形丸底壺と合わせ口になった状態で出土した。

布留式土器は、小形三種の土器（小形高杯・小形丸底壺・小形器台）を基調とするもので、器種構成の上で、壺の占める割合が減少することが知られている。

こうした上で、SK-04出土の壺の出土は極めて興味深い出土形態を示している。

遺構の性格として考えられるのは、合わせ口の壺棺であるが、口径部の最も細い箇所が残存しており、胎兒の棺と考えられるが、壺が倒立している点から、疑問も残る。

SX-11 方形周溝墓と考えられる遺構で、第3トレンチの東端で検出された。周溝の東半部が調査域外に出ており、南北長12m 20cmを測る。遺構の深さは、最大で30cm程度で、若干量の布留式土器を含む。主体部は確認されなかった。

SX-12 第3トレンチの北西隅で検出された遺構で、SX-11同様に方形周溝墓と考えられる。周溝の北半部が調査域外に出ており、東西長17m以上を測る。方形周溝墓の中央部では、2つの遺構が検出された。西側の遺構は、周溝部と同様に第IV層（暗青灰色粘質土層）上面で検出されたが、調査の結果、奈良時代以降の素振りの井戸（SE-03）であることが明らかになった。東側の遺構は、第V層（淡灰褐色砂質土層）上面で確認された。この遺構は、東西1m 80cm・南北1mを測る土坑であったが、弥生時代中期の土器を含んでおり、周溝墓の土器の年代との間に隔たりが認められる。いずれの遺構も方形周溝墓の主体部にならなかつた。

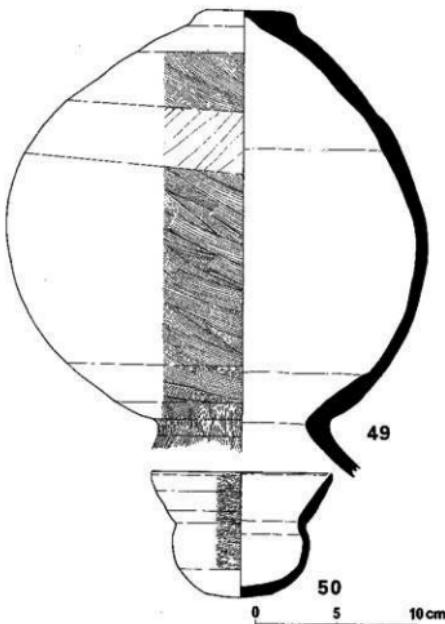
S D-04 第3トレンチの東南部で確認された遺構（SD-04）は、方墳の周溝と考えられるSD-11に切り込まれておらず、埋土のなかに布留式土器と須恵器が含まれている。須恵器は、5世紀後半頃の形式をもつもので、蛇塚遺跡の中では最も古い形式のものである。

以上の事から、古墳時代の遺構は、5世紀後半の布留式土器新段階の時期を示すものと、6世紀後半から7世紀初頭の時期を示すものに大別できる。

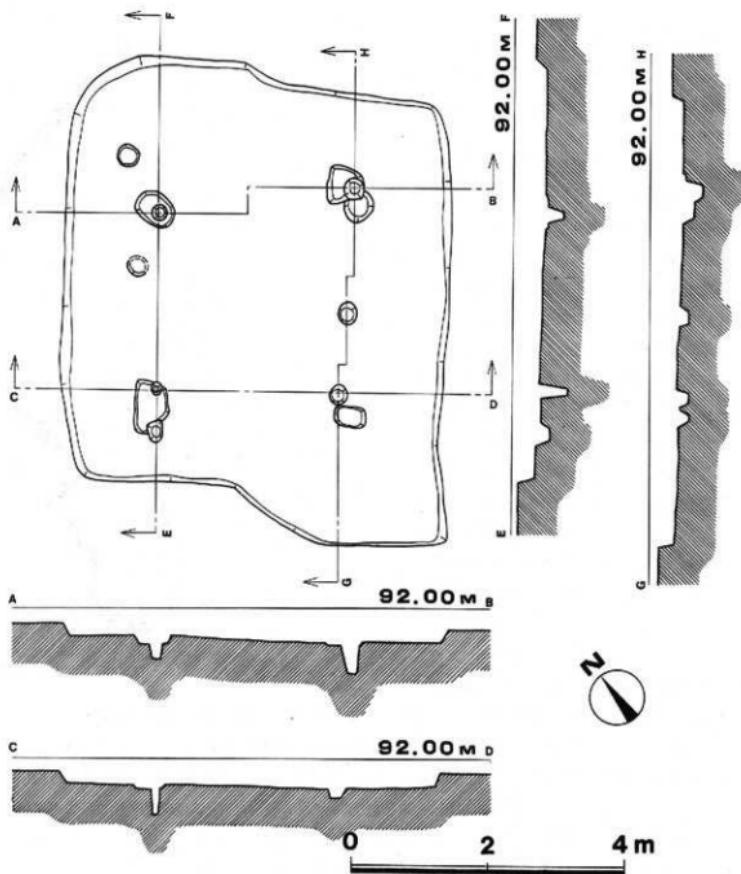
F. 弥生時代の遺構(1)

「弥生時代の遺構として、中期のものと後期のものがある。後期の遺構は住居跡が多く、C地区の外寄りに集中しており、中央部は空堀地になる。」

S B-01 第1トレンチの南端で検出された遺構で、南辺部が調査区域外に出る。東西8m 80cm・南北8m



第10図 C地区SK-04出土遺物実測図



第11図 C地区 S B - 02遺構平面図

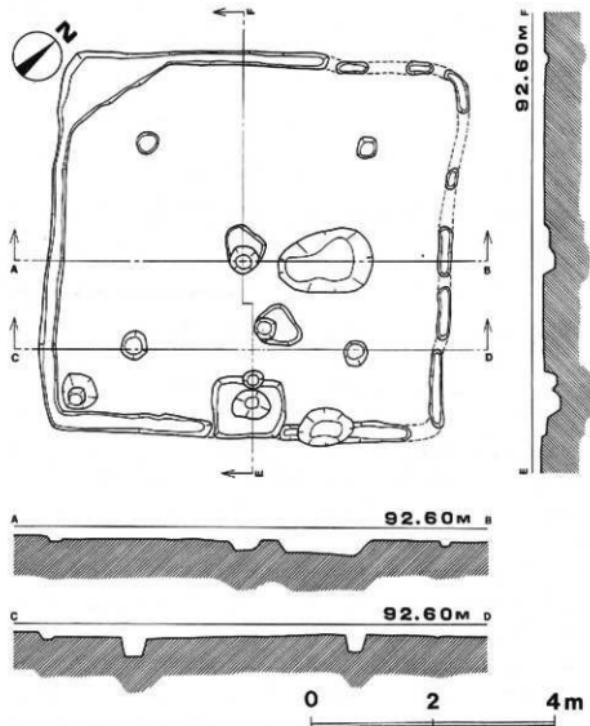
以上を測り、およそ N-18°-W の方向にある。北辺と東辺はほぼ直角を示すが、西辺は中央が折れた形を示しており、五角形プランになる可能性を持つ。壁溝および柱穴は認められない。

S B - 02 第3トレンチの北部で検出された遺構である。東西 5 m 70 cm、南北 7 m を測り、およそ N-39°-E の方向にある。北辺の西半分と南辺の東半分が外方に広がっているが、基本的には四角形であったと考えられる。壁溝は認められないが、主柱穴は 4 つ認められる。また住居の内部には、焼土の根跡も土括も認められなかった。S B - 02 は、第IV層(暗青灰色粘質土層)上につくられており、下層の S B - 05 と上下位置にあるが、切り込みはない。

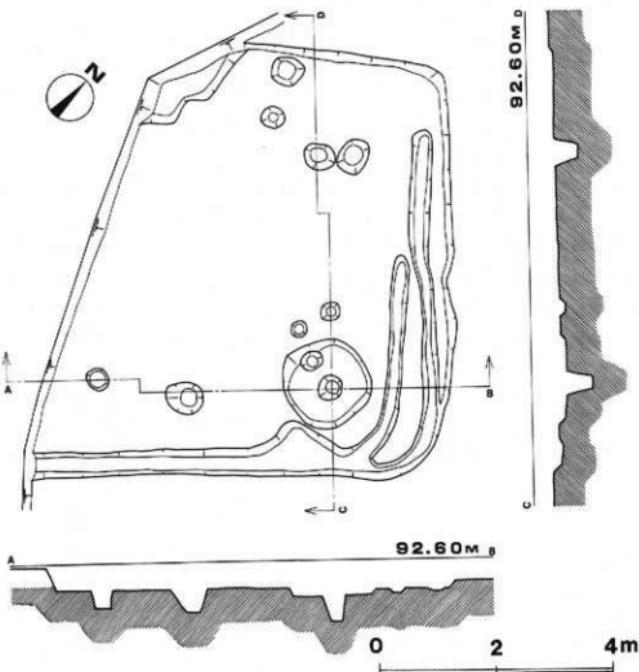
S B - 03 第3トレーナーの南端で検出された遺構で、砂礫層上に建てられている。北辺は擾乱により消失しており、東西5m80cm・南北5m20cm以上を測る。およそN-28°-Wの方向にある。南辺の一部にのみ壁溝様のものが認められるが、主柱穴は認められない。

S B - 04 S B - 03の西方に隣接しており、東西3m80cm・南北3m60cmを測る非常に小規模のものである。平面形は隅丸方形を示しており、およそN-44°-Eの方向にある。壁溝は認められないが、4つの柱穴が確認されており、この一部が主柱穴になると考えられる。

S B - 06 第4トレーナーの東端で検出された遺構で、上部のはほとんどを消失している。東西6m65cm・南北6m40cmを測り、およそN-44°-Wの方向にある。壁溝は、東辺の一部が消失しているものの、住居内を一周しており、北西の隅で広がる。主柱穴は4つ確認されたほか、住居の中央にも1つ柱穴が認められる。この中央の柱穴の東側には、東西1m55cm・南北1m5cm・深さ20cmの土括が検出された。土括内の埋土は暗灰褐色土で、遺物を含まず、焼土や炭の堆積も認められることから、炉跡の可能性は低い。また、南辺の中央には、東西1m20cm・南北1m・深さ35cmの規模の土括が認められ、貯蔵穴として機能も予想される。



第12図 C地区 S B - 06遺構平面図

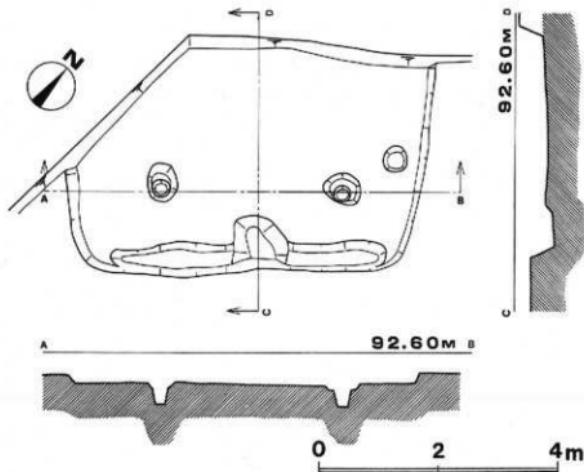


第13図 C地区 SB-07遺構平面図

SB-07 第4トレンチの西端で検出された遺構で、西辺部が調査区域外に出る。東西7m10cm以上・南北7m25cmを測り、およそN-45°-Wの方向にある。東辺部と南辺部で壁溝が認められ、東辺部には建て替えによって生まれた壁溝とそれ以前の壁溝の2本が認められる。主柱穴は4本のうち3本までが確認されたが、北西部の1本は調査区域外にあると想定される。炉跡・貯藏穴等の施設は確認されなかった。

SB-08 第4トレンチの北端で検出された遺構で、北辺部が調査区域外に出る。東西5m90cm・南北3m85cmを測り、およそN-42°-Wの方向にある。南辺部には壁溝が認められ、中央に東西90cm・南北75cm・深さ15cmの土括が確認された。土括内には、焼土や遺物が認められず、貯藏穴と考えられる。主柱穴は南側の2本が確認され、北側の2本は調査区域外にあると想定される。住居跡全体の残りは悪く、上部の大半が削平されており、10cm程の深さを保つのみであった。

SB-09 SB-07とSB-08の中間に位置し、第4トレンチの北西隅で検出された。住居跡の西辺部は調査区域外に出る。東西1m80cm以上・南北5mを測り、およそN-18°-Eの方向にある。壁溝は認められない。主柱穴は南西の1本のみが認められ、その他は調査区域外にあると想定される。遺物の出土は認められなかつた。



第14図 C地区 SB-08遺構平面図

SB-10 第4トレンチの南端中央で検出された遺構、東辺部と南辺部が調査区域外に出る。東西5m以上・南北2m80cm以上を測る。壁溝および主柱穴は認められず、北西隅部に東西1m80cm・南北1m20cm・深さ25cmの規模の土坑をもつ。およそN-5°-Wの方向にある。

以上9棟の竪穴住居跡が検出されたが、構造形態の相違から3つのパターンに区分することができる。

A群、平面形が多角形の要素をもつもの(SB-01のみ)。壁溝を持たない。

B群、平面形が四角形を呈し、壁溝をもつもの(SB-06・07・08)。このうち壁溝が四周するものは1棟のみ(SB-06)であるが、立地の傾斜した高い側にのみ壁溝を持つ(SB-07・08)だけでも機能は等しいと考えられる。この群の住居跡は主柱穴を4本配しており、住居の南辺中央に貯蔵穴と思われる土括をもつ(SB-06・08)。床面積は42.6m²(SB-06)前後を測る。

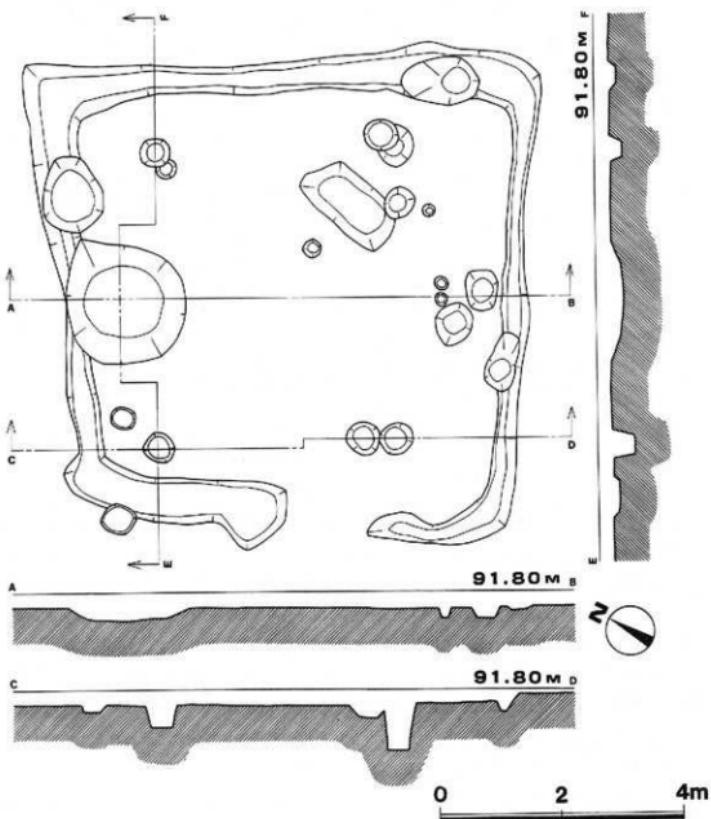
C群、平面形が四角形を呈し、壁溝をもたないもの(SB-02・03・04・09・10)。主柱穴を4本配するもの(SB-02)も認められるが、大半は不明瞭で、床面積も狭く13.7m²(SB-04)を測るものもある。また、B群に認められる貯蔵穴様の土括も検出されていない。

以上の3群の住居跡がC地区で確認されたが、いずれも調査区の外周部に寄って建てられており、中央の高まりは住居の空白地となる。また、方形の平面をもつ住居ではあるが、中軸線の方位に共通項が認められない点もこの住居跡群の特徴といえる。

G. 弥生時代の遺構(2)

弥生時代後期の遺構を精査している際に、第3トレンチの北部で下層遺構の存在が確認された。第3トレンチの北部では、第IV層として暗青灰色粘質土層が遺構面となっていたが、この層位中にも遺物が含まれていたため、さらに同層を掘り下げたところ、弥生時代中期後半(畿内第IV様式併行期)の遺構面を検出した。

遺構としては、竪穴住居跡・土括・ピット群があげられる。同時期の遺構は、第3トレンチ北部に集中しているが、例外的に第2トレンチ南東隅で溝状遺構(SD-02)を確認した。



第15図 C地区 SB-05遺構平面図

SB-05 SB-02のベースとなっていた暗青灰色粘質土層より検出された。位置的にはSB-02と重なり合うが、切り合い関係は無い。遺構の上部は削平を受けており、壁溝と主柱穴のみを残す。平面形は台形に近い四辺形で、東西8m・南北7m20cm(西辺)~8m50cm(東辺)を測る。床面積は62.8m²と極めて広い。

壁溝は周囲しており、西辺部の中央がとぎれることから、西方に入口を持つと思われる。主柱穴は4本配されている。北辺部の中央に、東西2m・南北1m95cm・深さ20cmの土括を持つ。貯藏穴と思われるが、弥生時代後期の住居跡が南辺部に土括を持つ傾向があった(SB-06・08)のと、大きく異なる。この堅穴住居跡はおよそN-31°-Wの方向にある。

SK-03 第3トレンチの北端部で検出された。東西1m80cm・南北1m・深さ25cmを測る土括で、第IV様式併行期の土器が出土した。

S K - 05 第3トレンチの中央部南寄りで検出された。東西1m80cm・南北1m70cm・深さ35cmを測る土で、S K - 03と同様に土器が出土した。

図版26にみられるように、第3トレンチ北部で検出されたピット群も下層遺構面精査時のもので、第IV様式併行期の時期があたえられる。

以上A～Gの7時期にわたる遺構が、調査C地区で確認され、上下3面の遺構面上に存在することを説明したが、検出した遺構の中には、時期や性格の不明なものも多くある。

3. 遺物

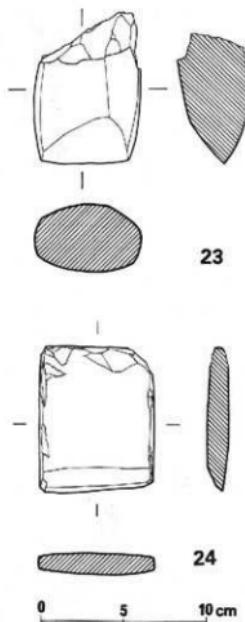
弥生時代 中期後半の遺物と後期の遺物に分かれる。中期後半の遺物は、第3トレンチ北部の最下層に多く認められる。(25・26・27・28)の4点の土器は、S K - 03出土の一括遺物で、四線文系の土器と近江特有の受口状口縁甕が共存する。第2トレンチ南東部のS D - 02からも受口状口縁甕²⁹が出土しており、いずれも畿内第IV様式併行期にあてられる。また石器の出土が2点あり、①は大型蛤刃石斧、②は扁平片羽石斧である。蛇塚遺跡では最も古い遺物が中期後半の土器であり、この時期に至ってもなお大型蛤刃石斧が使用されていた様である。

後期の遺物は、堅穴住居跡を中心に出土しており、壺・高杯・鉢などがあり、大形の壺³⁰や受口状口縁の鉢³¹などが認められる。

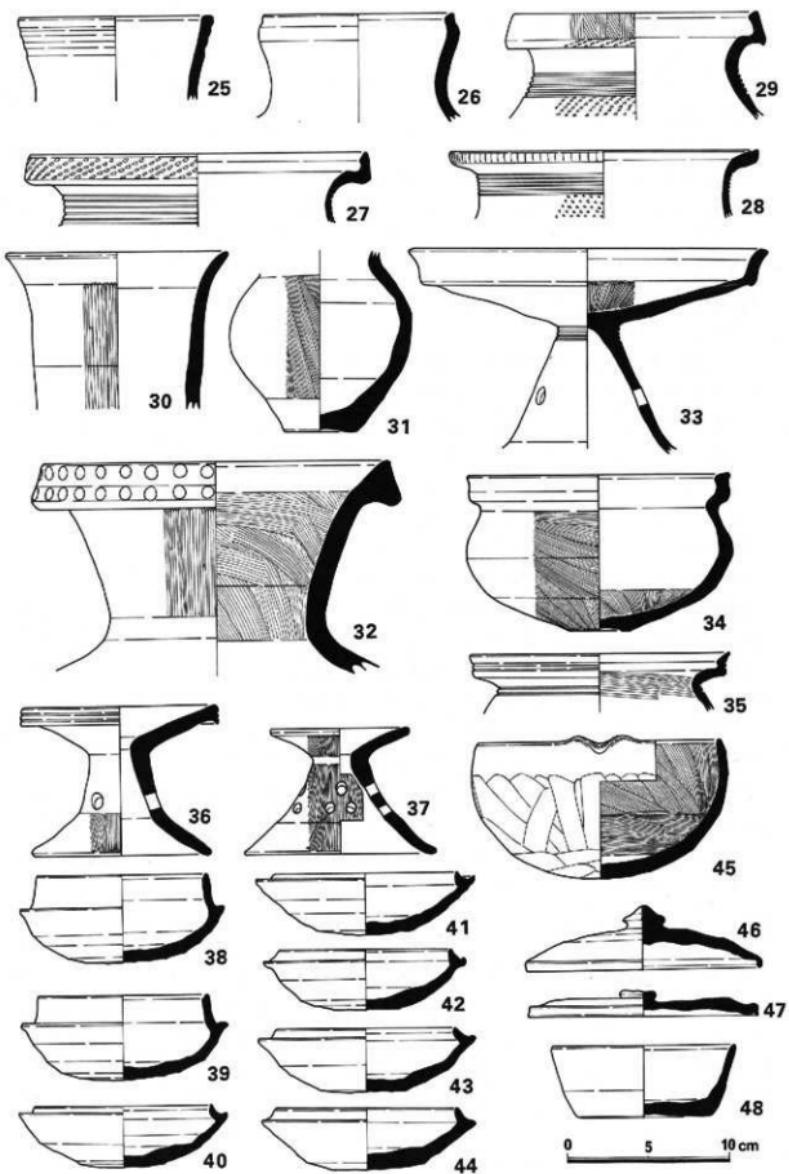
古墳時代 布留式土器と須恵器がある。布留式土器はS K - 04出土の壺³²と小形丸底壺³³に代表され、新段階の土器片と共に5世紀後半期の須恵器(38・39)の出土が認められる。その他の須恵器は古墳時代の中でも新しいものが多く、(40・41・42・43・44)は6世紀末～7世紀前半のものである。

歴史時代 飛鳥時代のものとしては、近江系の長胴壺や鍋などの出土が認められるが、珍しい遺物として片口付鉢³⁴がある。口径14.8cm・高さ8.4cmを測り、器壁外面はヘラ削り、内面ハケ調整を施すものである。奈良・平安時代の遺物としては、須恵器の杯³⁵・杯蓋³⁶・47・双耳壺³⁷などがあげられる他、灰釉の小壺³⁸があり、底部外面に糸切り痕をとどめている。

包含層の上面で検出された火葬墓の出土遺物には、土師器と銅錢がある。S X - 02からは銅錢5枚が出土したが、その内訳は、開元通宝(唐銭)・祥符元宝・淳化元宝(北宋銭)・永楽通宝(明銭)である。これらの古銭は「六道銭」を意識した一括遺物であり、同遺構の年代の上限を「永楽通宝」から14世紀初頭と考えるに至った。しかしながら、S X - 03から出土した土師器(51～58)は共出した銅錢「貞觀永寶」(平安時代)と年代に開きがあり、銅錢は伝世品と理解される。土師器の杯(51～58)は、県内にあまり類例を見るものではないが、岐阜県下の中世遺跡出土遺物に類似しており、13世紀頃と考えたい。今後の出土資料により正確な年代をどうものである。



第16図 C地区 出土遺物実測図



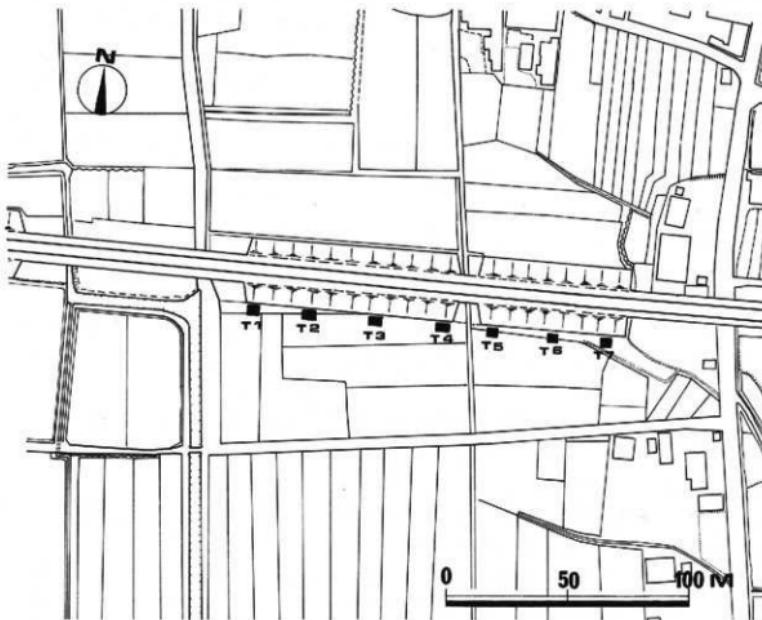
第17図 C地区 出土遺物実測図

(4) D 地区

今回のは場整備 I 区の南東隅の一画が、鎌倉時代の寺院跡とされる上田遺跡に隣接するため、排水路箇所にトレンチを設け、調査を実施した。

調査地区は、東海道新幹線の線路に沿った南側で、東西 180m の範囲に $2\text{ m} \times 4\text{ m}$ の試掘トレンチ 7 つを設け、西側より T-1 ~ T-7 と名付けた。

調査の結果、当調査箇所は新幹線建設時の擾乱を受けており、遺構・遺物の存在は確認されなかった。



第18図 D地区 トレンチ配置図

5. ま と め

今回の調査によって、これまで全く周知されていなかった上田町西部の蛇塚遺跡を明らかにすることができ、地元ならびに県農林部耕地建設課・八日市土地改良二課の御理解を得、遺跡の一部を現状のまま保存することができたのは幸いなことであった。

調査の結果、蛇塚遺跡は弥生時代から室町時代に至る複合遺跡であることが判明した。

蛇塚遺跡が成立したのは、弥生時代中期後半である。当時の集落は、調査区の西方に寄っており、B地区・C地区において、多量の遺物と遺構を検出した。この時期には、居住区と墓域に明確な区分が無く、竪穴住居跡と土括墓と思われる遺構(S K-03・05)が隣接した位置にある。次の後期になるとC地区に居住区が構成され、A地区に墓域を築いたと考えられる。居住区には、異なったタイプの竪穴住居跡が共有し、集落を構成する。A地区に築かれた遺構は、方形周溝墓群と推測され、S X-01の1基のみを調査し、南部の試掘調査箇所を現状保存した。同遺構群は南北117m・東西62mの馬の背状の微高地に所在し、外周間に幅1m程の周溝(S D-02・03)が取り巻き、墓域を区切ると考えられる。同時期の方形周溝墓群としては、これより南方1kmに所在する勧学院遺跡があるが、周溝部の幅や規模に差異があり、両者の関係については、今後の課題とされよう。

続く古墳時代においては、庄内式併行期の遺物を多く出土したものの、遺構が確認されたのはB地区の溝のみであった。布留式併行期では、C地区を墓域として使用しており、方形周溝墓と柵棺が確認された。さらにC地区では、方墳の残痕状の溝が検出されたが、古墳と決定できる資料は得られなかった。

歴史時代にはいると、遺物の出土に対して、遺構があまり検出されず、井戸のような深い遺構だけが残る。これは上部が削平された事を示しているが、A地区・C地区とともに複雑な変化を繰り返し、現状の微高地状に堆積したようである。

C地区で確認された遺物包含層は最高32cmの厚みを測り、さらに上部に室町時代の火葬墓を有することは、驚嘆すべきことであった。火葬墓は竜王町堀ヶ谷遺跡・能登川町猪子遺跡に類を求めることができ、また土器と銅鏡から14世紀以降の火葬形態として捉えられる。

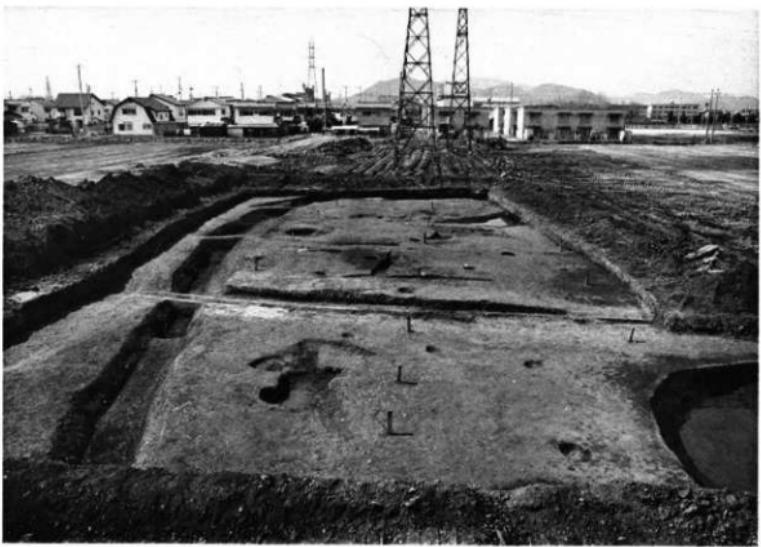
以上のように、蛇塚遺跡では、7時期に及ぶ遺跡の複合形態をつかむことができ、また、一地域における集落と墓域の変遷をとらえる貴重な資料を得ることができた。

今回の調査で出土した遺物は、整理箱に200箱以上に及び、ここにその一部を紹介したにすぎない。蛇塚遺跡の各時代の問題点は、今後、資料を公開する過程で論及するものとし、ひとまず調査の全容をここに報告する。

図 版



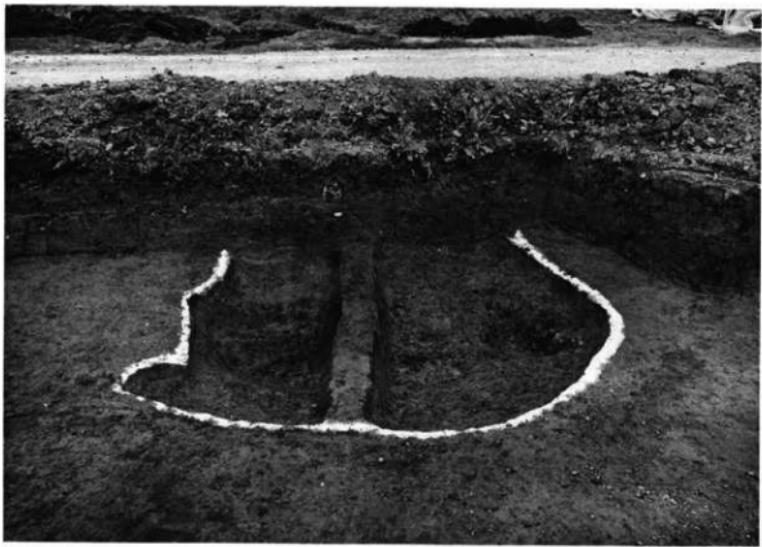
A地区 調査前全景



A地区 第12トレンチ全景（南より）



A地区 第12トレンチ SX-01 (北東より)



A地区 第12トレンチ SX-01 (北より)



A地区 第12トレンチ SX-01 (北より)



A地区 第14トレンチ SX-01 (南より)



A地区 第12トレンチ SX-01 (南西より)



A地区 第12トレンチ SX-01 (北西より)



A地区 第12トレンチ SB-01 (南東より)



A地区 第12トレンチ SD-03 (南東より)



A地区 第12トレンチ SD-03 遺物出土状況



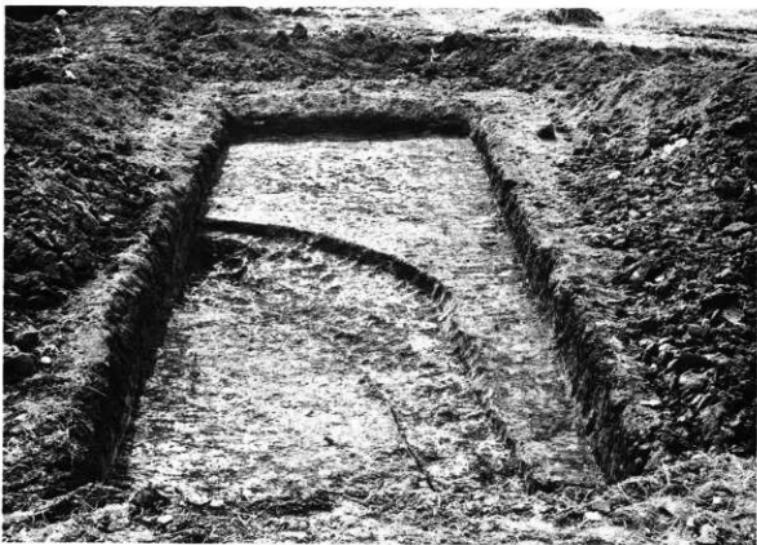
A地区 第12トレンチ SD-03 遺物出土状況



A地区 第12トレンチ SD-03 遺物出土状況



A地区 第12トレンチ SD-03 遺物出土状況



A地区 第9トレンチ（東より）



A地区 第6トレンチ（北より）



A地区 第9トレンチ（西より）



A地区 第2トレンチ（西より）



B地区 全 景（西より）



B地区 第3トレンチ（東より）



B地区 第2トレンチ（北東より）



B地区 第1トレンチ（東より）



C 地區 調 査 風 景



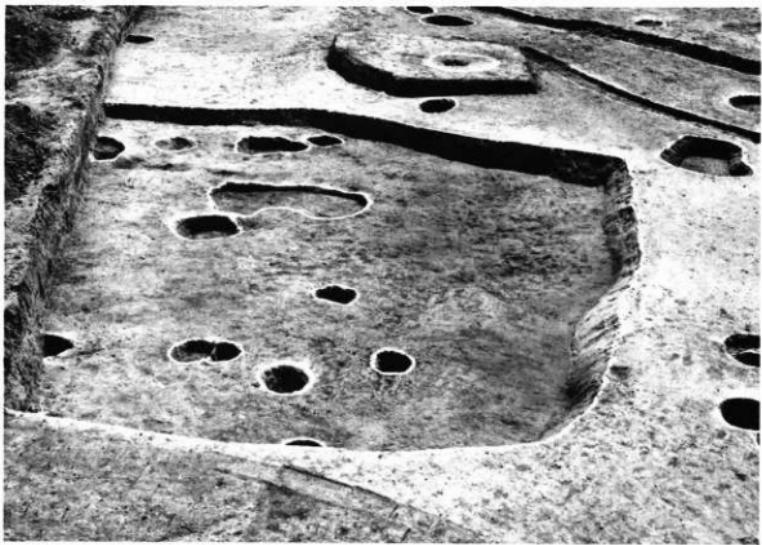
C 地區 調 査 風 景



C地区 第1トレンチ全景（東より）



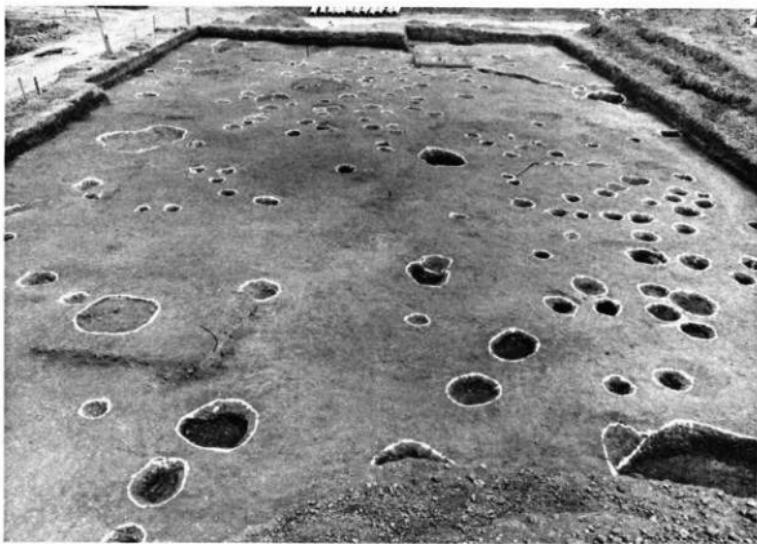
C地区 第1トレンチ S D-01・03



C地区 第1トレンチSB-01（東より）



C地区 第1トレンチSB-01（北より）



C地区 第2トレンチ全景（西より）



C地区 第2トレンチSE-01（北より）



C地区 第2トレンチ SX-02 (南より)



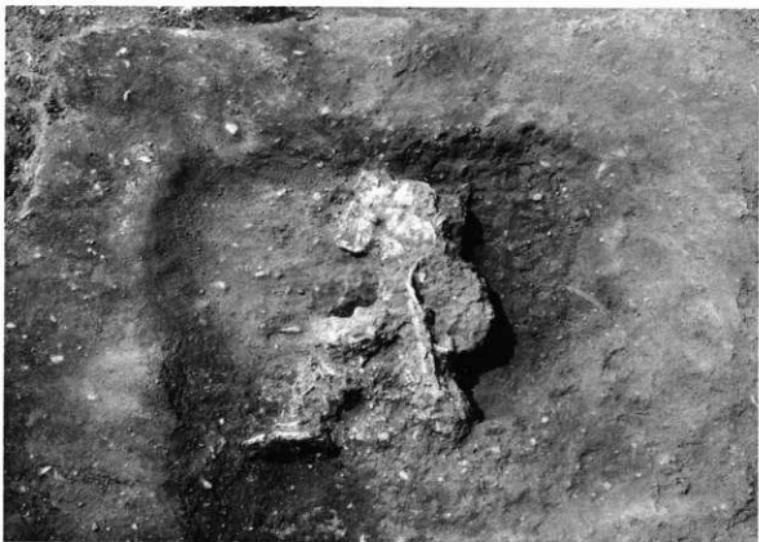
C地区 第2トレンチ SX-02 (南より)



C地区 第3トレンチ上層遺構面（北より）



C地区 第3トレンチ下層遺構面（北より）



C地区 第3トレンチSX-05(南より)



C地区 第3トレンチSB-12(西より)



C地区 第3トレンチ SK-01 (北より)



C地区 第3トレンチ SK-02 (西より)



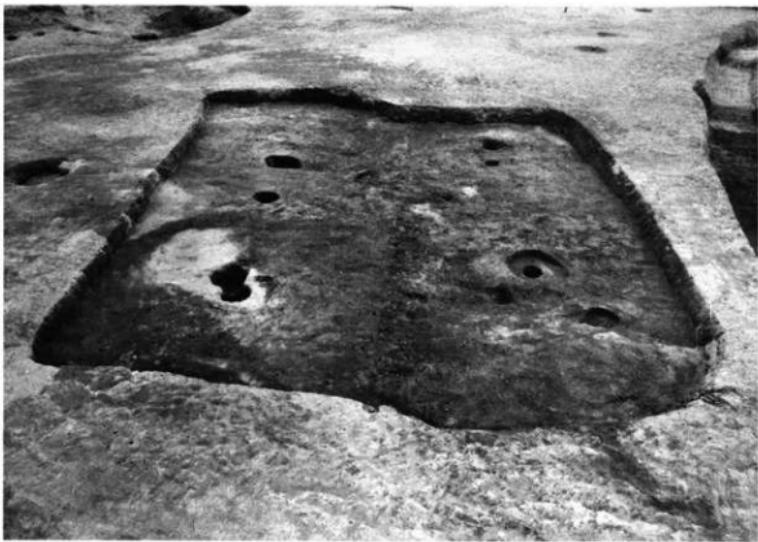
C地区 第3トレンチSX-11（西より）



C地区 第3トレンチSX-11（北東より）



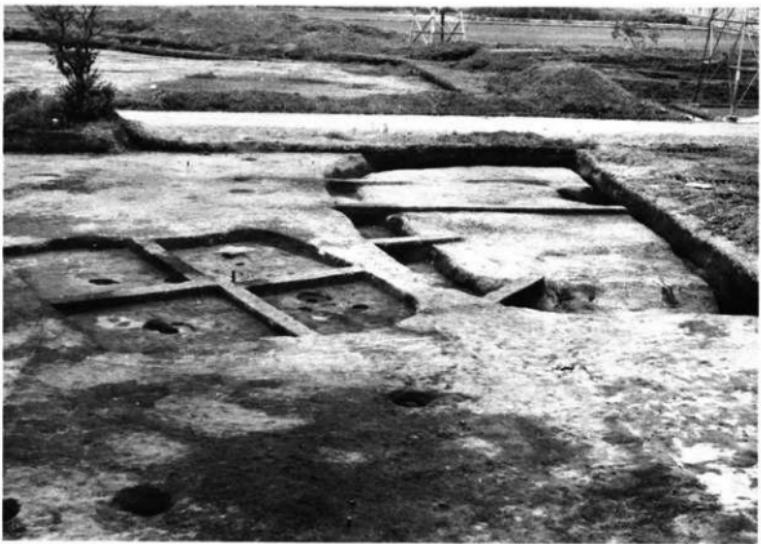
C地区 第3トレンチ SB-02 (北東より)



C地区 第3トレンチ SB-02 (北東より)



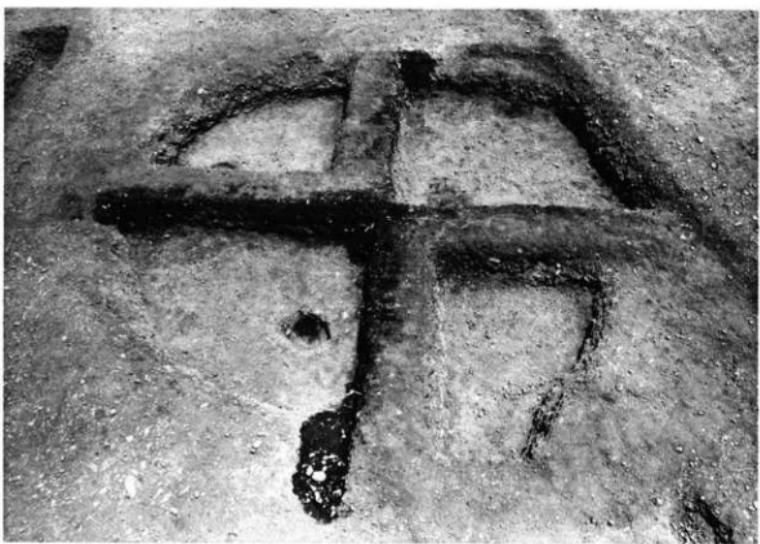
C地区 第3トレンチSD-11(北東より)



C地区 第3トレンチSB-02・SX-12(東より)



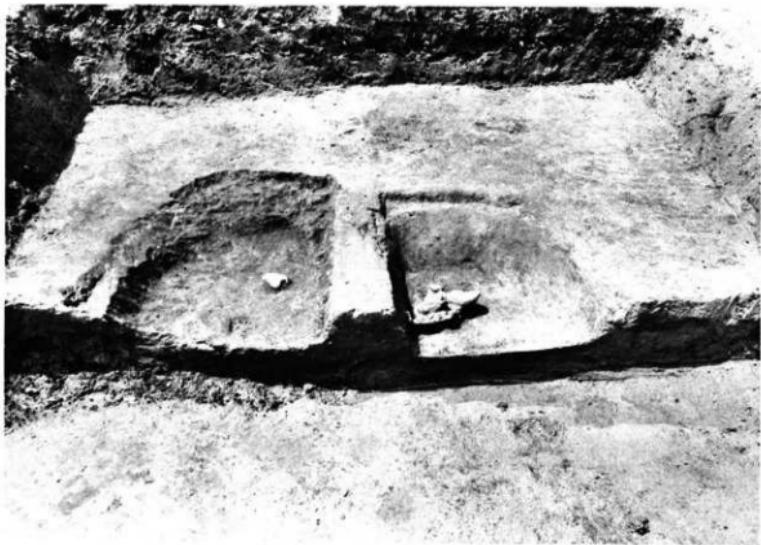
C地区 第3トレンチSB-03（南より）



C地区 第3トレンチSB-04（西より）



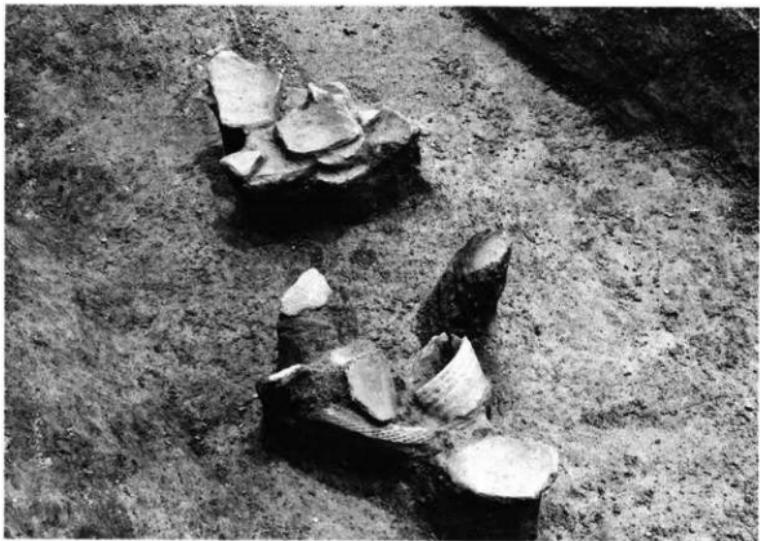
C地区 第3トレンチSX-12・SK-03（南より）



C地区 第3トレンチSK-03（南より）



C地区 第3トレンチSK-03(東より)



C地区 第3トレンチ SK-03遺物出土状況



C地区 第3トレンチ下層遺構面全景（北西より）



C地区 第3トレンチSB-05（北西より）



C地区 第3トレンチSB-05(東より)



C地区 土層堆積状況(北西より)



C地区 第4トレンチ全景（南より）



C地区 第4トレンチSD-12（南西より）



C地区 第4トレンチSB-11(南西より)



C地区 第4トレンチSB-10(西より)



C地区 第4トレンチSB-06土塁



C地区 第4トレンチSB-06土塁（北より）



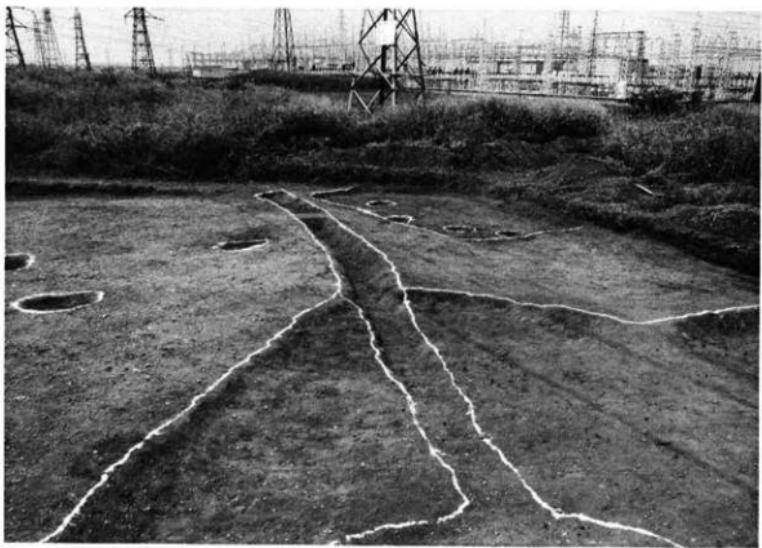
C地区 第4トレンチSB-07（南より）



C地区 第4トレンチSB-07（東より）



C地区 第4トレンチSB-08（南より）



C地区 第4トレンチSD-07（東より）



C地区 第4トレンチSK-04壺棺



C地区 第4トレンチ遺物出土状況



D地区 全 景（西より）



D地区 全 景（東より）



D地区 第3トレンチ



D地区 第5トレンチ

圖版三六 出土遺物（A地區）



9



10



8



7



6



5

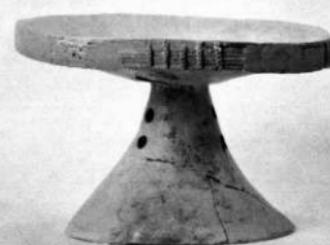


1

出土遺物



11



3



12



2



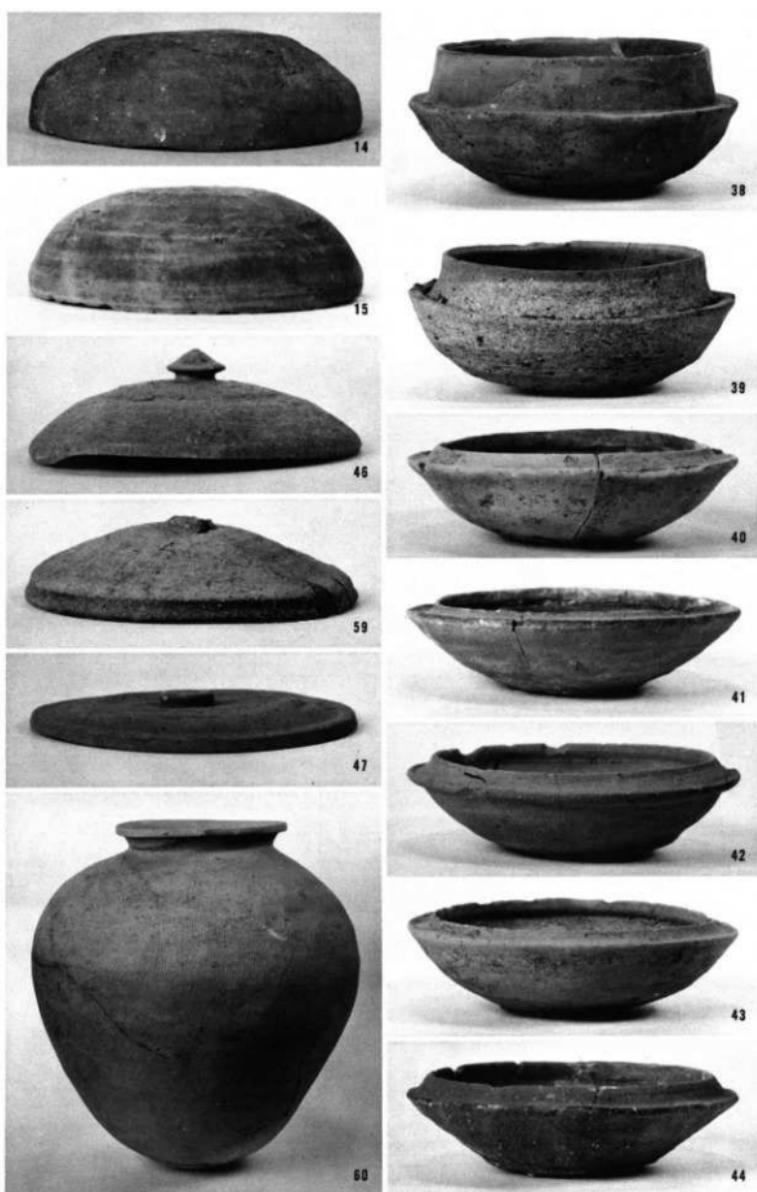
4



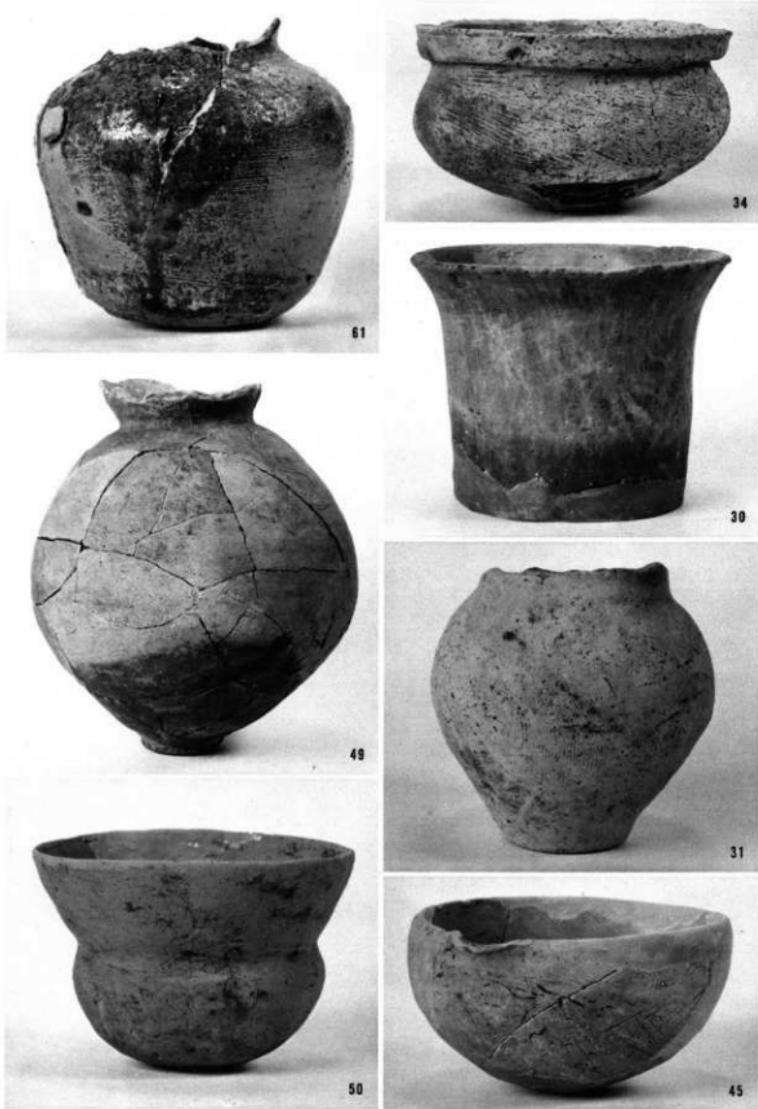
37



13



出土遺物



出土遺物



62



65



66



63



67



48



64



33



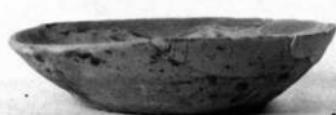
出土遺物



51



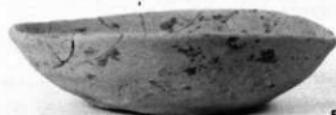
56



52



57



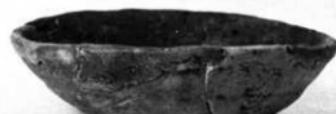
53



58



54



55

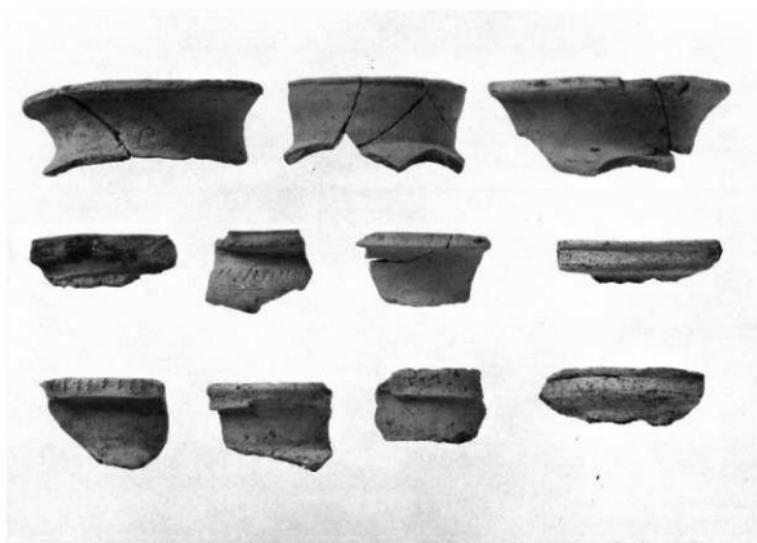
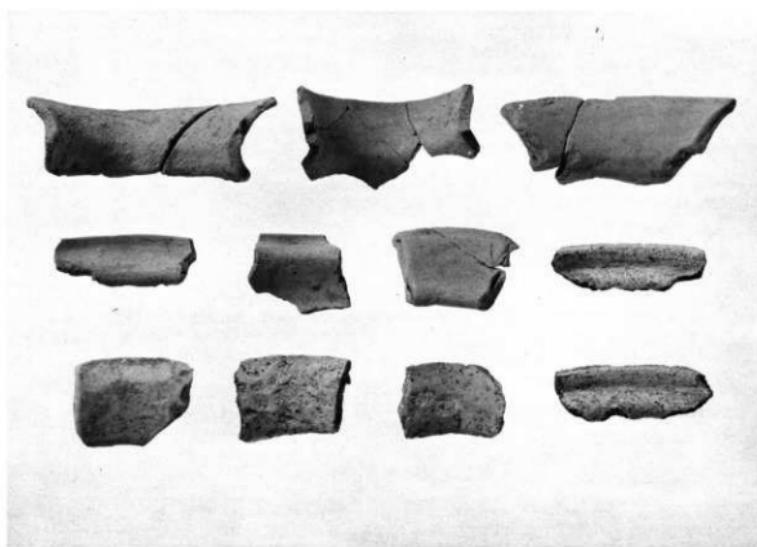


73

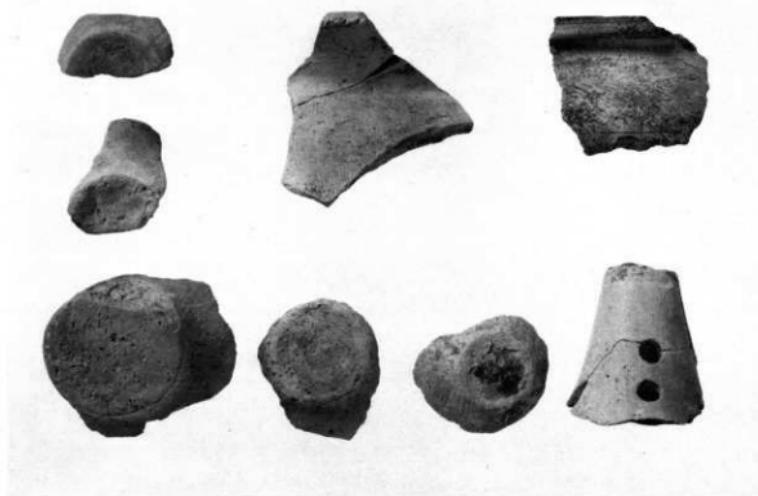


36

図版四三 出土遺物（C地区）

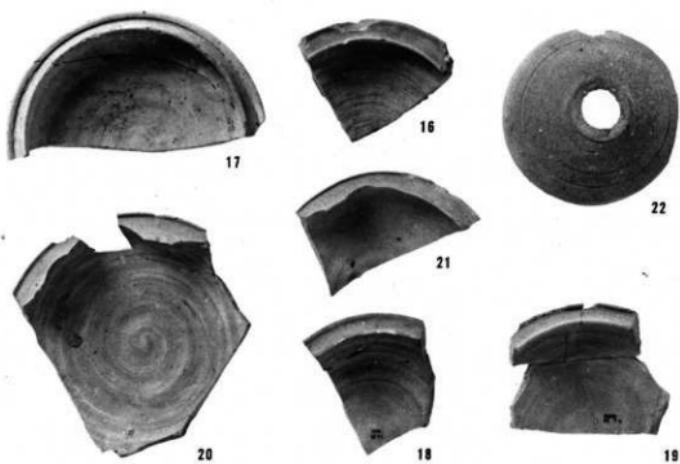


出土遺物（A地区第12トレンチ S D - 0 1）



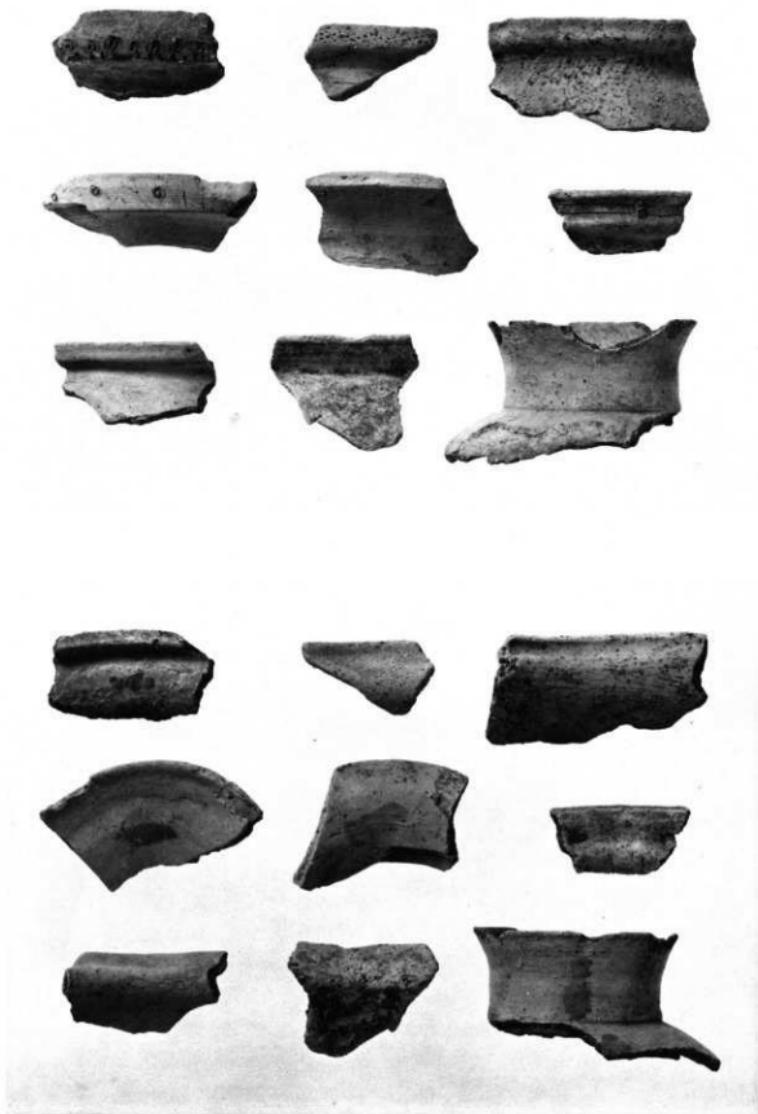
出土遺物（A地区第12トレンチ S D - 0 1）

圖版四五
出土遺物（C 地區）



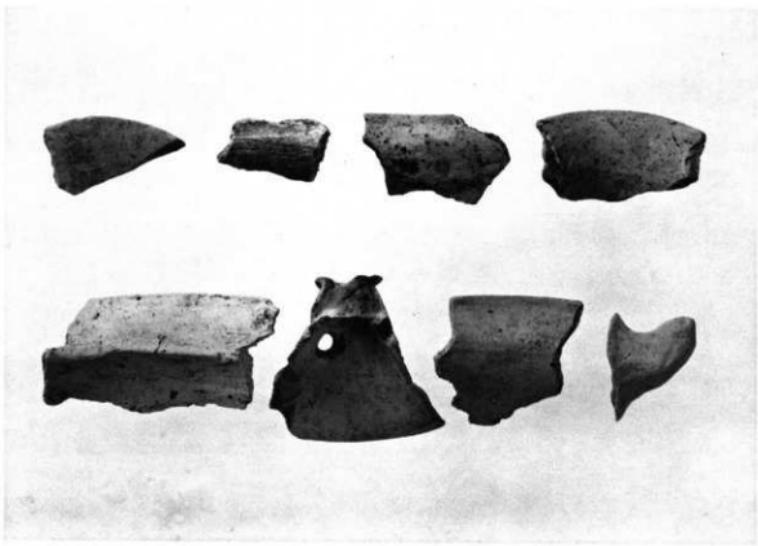
出土遺物（B 地區）

図版 四六 出土遺物 (C 地区)



出土遺物 (C 地区第3トレンチ SD-11)

図版 四七 出土遺物 (C 地区)



出土遺物 (C 地区第3 トレンチ SD-11)

図版四八 出土遺物（C地区）



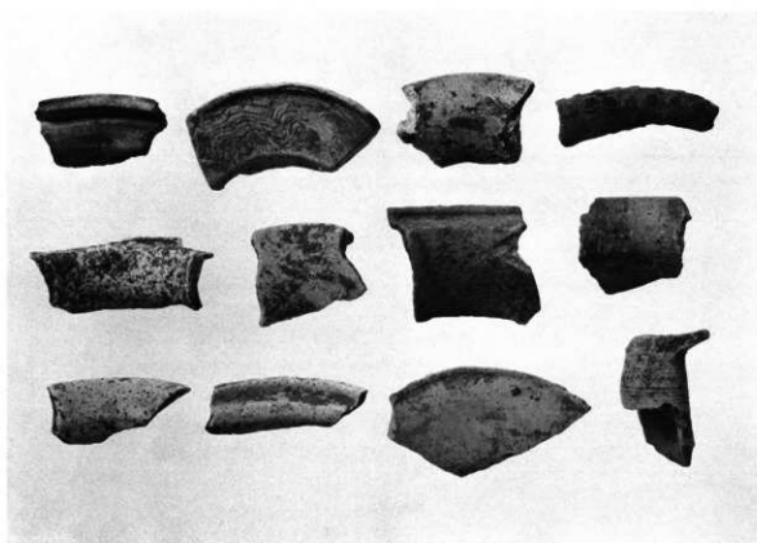
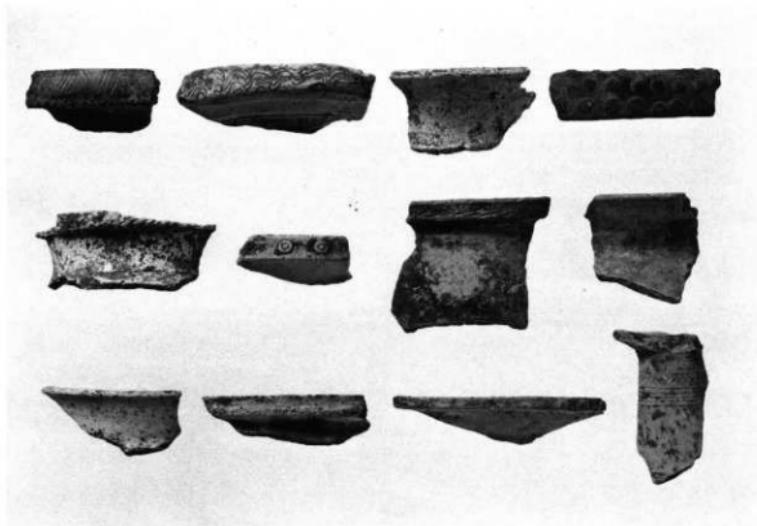
出土遺物（C地区第3トレンチSB-02）

図版 四九 出土遺物（C 地区）



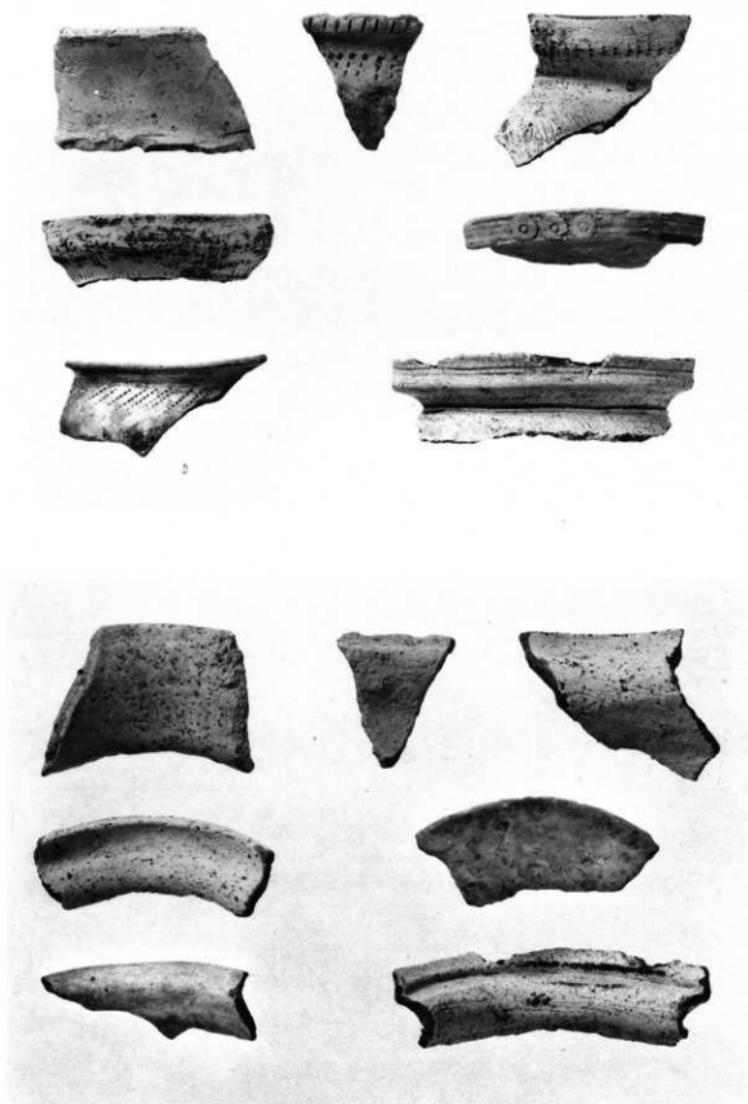
出土遺物（C 地区第3 トレンチ S B - 0 2）

図版五〇 出土遺物（C地区）

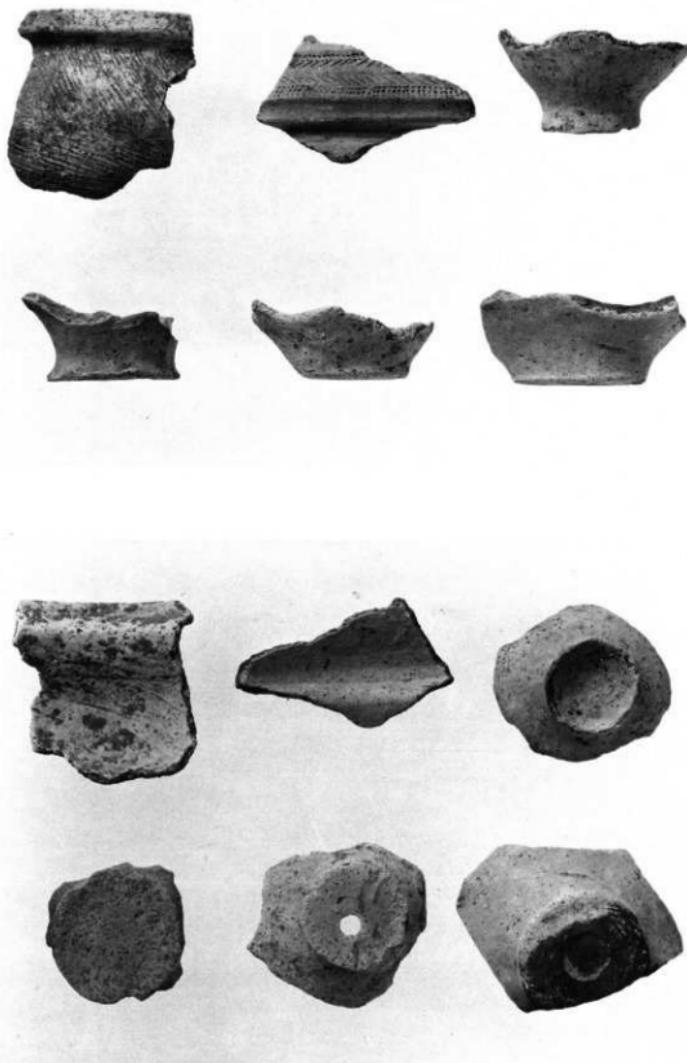


出土遺物（C地区第3トレンチSK-03）

図版五一 出土遺物（C 地区）



出土遺物（C 地区第 3 トレンチ）



出土遺物（C 地区第 3 トレンチ）

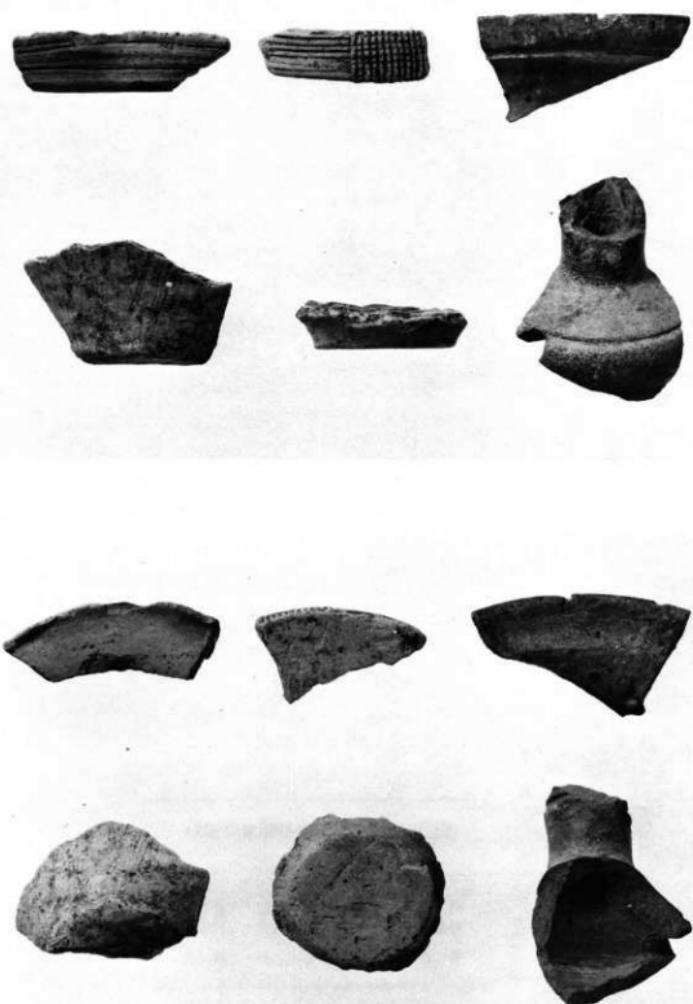


出土遺物 (C 地区第 3 トレンチ S B - 0 3)



出土遺物（C地区第3トレンチ SK-04）

図版五五 出土遺物（C地区）



出土遺物（C地区第4トレンチS D-12）

は場整備関係遺跡発掘調査報告書

XI - 2

昭和60年3月

編集 滋賀県教育委員会
発行 財団法人滋賀県文化財保護協会

印刷 株式会社 中村太吉舎